

京都女子大学 地域連携研究センター

Annual Report 2019



目次

■地域連携研究センター	
京都市大学補助事業「学まち連携大学促進事業」終了にあたって 地域連携研究センター長 竹安 栄子	01
東山区における高齢者のための地域福祉活動―地方都市との比較から見える課題― 地域連携研究センターコーディネーター 岡崎 昌枝	04
■女性地域リーダー養成プログラム	
2019年度開講科目一覧	09
■「学まち推進型」連携活動補助事業	
令和元年(平成31年)度 学まち推進型連携活動補助事業一覧(連携プロジェクト)	16
京都刑務所「矯正展」における造形ワークショップ“ワクワク木育キャラバン” 発達教育学部児童学科 教授 矢野 真	17
第3回KWU小学生プログラミングコンテスト 現代社会学部現代社会学科 講師 丸野 由希	19
音楽活動による地域貢献・地域交流プロジェクト【京女の“音楽”宅配便】 発達教育学部教育学科・音楽教育学専攻 教授 土居 知子	21
京都の伝統染織産業における分野を越えた産産学連携の商品開発 家政学部 生活造形学科 教授 青木 美保子	23
福祉施設と作家のものづくりプロデュースと情報発信 生活デザイン研究所 非常勤研究員 宮原 佑貴子	25
まちライブラリーに関する調査研究:「ひがしやま文庫」の実現に向けて 図書館司書課程 講師 桂 まに子	27
「呼吸法を用いた歌唱活動で健康法を学ぼう」 発達教育学部教育学科・音楽教育学専攻 教授 ガハブカ 奈美	29
「祇園新橋に生きる女性たち」聞き書きプロジェクト報告 現代社会学部 現代社会学科 准教授 森久 聡	31
東山区における高齢者のための地域福祉活動の実態調査 地域連携研究センターコーディネーター 岡崎 昌枝	33
■生涯学習	
京都女子大学が提供する「多様な学びの場」 ～地域連携研究センター事務局より～	35
2019年度公開講座一覧	36
2019年度 生涯学習講座一覧	37
2019年度 履修証明プログラム	38
「いつまでも、いくつになってもよい姿勢」3回シリーズ 地域連携研究センター客員研究員 原田 奈名子	39
リカレント教育課程 ～働くための学びの場～	41
主な活動実績	43
協定締結先と連携協定内容一覧	44
京都女子大学地域・産学官連携ポリシー	45

※教員の所属・職名は令和元年度（平成31年度）当時

京都市大学補助事業 「学まち連携大学促進事業」終了にあたって

地域連携研究センター長 竹安 栄子

本年度は、4年間にわたって展開してきた京都市大学補助事業「学まち連携大学促進事業」の最終年にあたる。この3月をもって、2016年9月からスタートした本事業を、当初計画通りに終了することが出来た。これもひとえに、連携先の諸機関ならびに地域の皆さまのご支援・ご協力のお陰である。ここに記して厚くお礼申し上げます。

今、コロナウィルス感染拡大が世界を揺るがしている。未知のウィルスの蔓延や気象変動、大規模災害など、これからのような予測不能な危機が発生するか不確実である。危機の時に粘り強く、果敢に課題解決に取り組む人材を社会に送り出すことが教育機関の重要な役割だと認識している。京都女子大学は、女子大学の使命として、自己の能力を活かして社会に貢献する自立した女性人材を養成することに取り組んできた。地域連携研究センターでは、連携活動の実践を通じて、学生が社会の実態を知り、社会が直面する課題に関心を寄せ、その解決に対して当事者意識をもって臨む人材の養成を目指して、「学まち連携大学促進事業」を実施してきた。私達の試みはスタートしたばかりだが、これまでの経験から社会的な視野をもった学生を少しずつ育てることができていると認識している。

事業の実施内容については、これまで各年次に発刊した『地域連携研究センターAnnual Report』の中で詳しく紹介してきたが、本事業の終了にあたり、改めてここで4年間の事業遂行の歩みを総括しておきたい。

本事業は地域連携型の教育プログラムを正課として展開することを目的として、事業目的達成のため、地域連携研究センターを中心として次のような事業を企画した。

1. 全学部の学生が受講可能な共通領域の中に、副専攻として「女性地域リーダー養成プログラム(申請時の名称は「地域系女子養成プログラム)」」の設置
2. イシュー別4領域(①子育てと高齢者支援、②安心安全・まちづくり支援、③京都・東山の歴史と文化、④京都の産業支援)における連携活動の拡充・実施
3. 連携協定締結先の自治体、地域、企業等との定例的な協議機関として「京女ネットワーク協議会(通称:京女ラウンドテーブル)」の組織化

以下、年次ごとの活動をまとめる。

I. 2016年度：実施準備期

初年度である2016年度は、(1)学内体制の整備、(2)調査・研究、(3)教育プログラムの開発および教育課程の変更、(4)連携関係の拡充の4項目について重点的に取り組んだ。

(1)学内体制の整備

まず京都女子大学の連携活動の方針として「地域・産学官連携ポリシー」を制定した。さらに学長のもと全学教職員を対象とした公聴会で本事業の目的・実施計画を説明し、全学的に共通認識をもって各連携活動が推進できる体制を整えた。また本事業遂行に従事するアシスタントの雇用、ホームページの開設などを実施した。

(2)調査・研究

先進事例として横浜国立大学、鶴見大学など連携活動実施の先進事例を調査した。本事業で構築した副専攻「女性地域リーダー養成プログラム」は、横浜国立大学の事例をモデルとしている。また鶴見大学の充実した生涯学習センターの活動は、本学で生涯学習講座を開設する指針を与えてくれた。丁寧に情報をふんだんに提供していただいた両大学の関係者に謝意を表する次第である。

(3)教育プログラムの開発および教育課程の変更

本事業の本格的な始動は10月からであったが、2015年度末からの本事業申請に向けた検討の場である学まち連携大学ワーキンググループで、共通領域(全学部全学年対象)の中の「教養科目(市民と社会1~3)」の枠組みを使って、企業による寄附講義(前期1科目、後期3科目)を2016年度から開設することを決定、4月から開講した。この4科目を基軸に、新たな教育課程として「女性地域リーダー養成プログラム」を構想、2017年度は試行段階として共通領域に新たに「連携活動科目群」を開設するため、学則の改正手続きおよび履修要項の整備等を行った。

(4)連携関係の拡充

2016年9月奈良女子大学と包括協定を締結した。これを記念して2017年3月に京都女子大学図書館交流の床で「女子大学の未来 地域社会とともに歩む女子大学」と題して、学まち連携大学促進事業の一環として奈良女子大学との合同シンポジウムを開催した。また2月に第1回京女ラウンドテーブルを開催した。京都女子大学と連携関係をもつ行政や企業が一堂に会して相互に意見交換をする場として初めての開催であった。この他、京都刑務所や三井住友銀行など企業、NPO法人などとの協定数は9件(奈良女子大学を含めて10件)であった。

(5)広報活動

地域連携研究センターのホームページを立ち上げた。印刷物としては『地域連携研究センターAnnual Report』創刊号を発刊した。

II. 2017年度：基盤形成期

2017年度は、主に(1)「連携活動科目群」の開設、(2)連

携協定拡充・連携活動実施、(3)情報発信に取り組んだ。

(1)「連携活動科目群」の開設

2018年度に「女性地域リーダー養成プログラム」開設をめざす基礎段階として、2017年度から自由・発展領域に新たに「連携活動科目群」を開設した。開講科目は、前年度から開設している産学連携講座4科目に1科目加えて5科目、入門科目である「連携活動入門」、さらに地域連携講座2科目を開講、計551人が受講した。

(2)連携協定拡充・連携活動実施

2017年度より、本事業計画の目的の一つであるイシュー別4領域の連携活動を実施した。地域課題をイシュー別に次の4領域、すなわち①子育てと高齢者支援、②安心安全・まちづくり支援、③京都・東山の歴史と文化、④京都の産業支援の領域を掲げ、「学まち連携プロジェクト」の実施を広く学内の教員に呼びかけた。2017年度は9件のプロジェクトの応募があり実施した。

また第2回京女ラウンドテーブルは、「東山区における地域防災」を共通テーマとして開催した。話題提供として、東山消防署員による東山区の過去の震災事例などの講演を聞き、参加機関との意見交換を行った。

(3)情報発信

ホームページの充実、『地域連携研究センターAnnual Report』に加えてニュースレター(年2回)を発行した。さらに2月には連携先であるハイアットリージェンシー京都、招徳酒造と連携して「京女が紡ぐ京の観光と食文化」と題してシンポジウムを開催した。

III. 2018年度：展開期

3年目の2018年度は、本事業の展開期と位置づけ、(1)副専攻「女性地域リーダー養成プログラム」の全科目開講、(2)連携協定拡充・連携活動実施、(3)情報発信を実施した。

(1)副専攻「女性地域リーダー養成プログラム」の全科目開講

2017年度に開設した8科目に加えて、2018年度には展開科目として「産学連携講座B3(働く女性のための労働基礎講座)」「連合京都・京都信用金庫・京都中小企業家同友会による寄附講義」および演習科目である「連携課題研究(集中講義)」2クラス(専任教員担当)(京都信用金庫による寄附講義)を開講、これによって計画のすべての科目が開設された。

(2)連携協定拡充・連携活動実施

昨年度実施した学内教員公募型の連携プロジェクトを継続実施した。2年目の2018年には全学より11件の応募があり活発に連携活動が実施された。また前年実施した成果発

表会を2018年度は学長裁量予算による「らしつよチャレンジ」および「学長採択型課題解決プロジェクト」と合同で実施した。発表件数が多くなったため、発表形式にポスターセッションを採用し、発表会後も引き続き交流の床の2階に展示することで多くの学生にもみてもらうことができた。発表会と同日に開催された京女ラウンドテーブルに参加された企業関係者の一部も発表会に出席し、本学の教員・学生の多様な活動内容を知っていただくとともに貴重なご意見を伺うことができた。また2018年度は初めての試みとして発表会終了後、京女ラウンドテーブルに出席した企業関係者と本学学生・教職員で懇親会を開催した。

(3)情報発信

前年度同様、『地域連携研究センターAnnual Report』とニュースレター(年2回)を発行した。

IV. 2019年度：完成期

本事業の最終年に当たる2019年度事業としては、何よりも本事業の計画当初よりの目的であった副専攻としての「女性地域リーダー養成プログラム」が完成したことをあげることができる。すなわち、全学共通科目として開設されていた「連携活動科目」を、2019年度入学生より「共通領域副専攻」として履修することが可能になった。

それ以外の主な事業としては、前年度同様(1)連携活動の実施と(2)2017年度より実施してきた京女ラウンドテーブルの開催、(3)情報発信がある。

連携活動は今年度もイシュー別4領域において9つのプロジェクトを実施した。「京都刑務所矯正展における造形ワークショップ」や「小学生のためのプログラミングコンテスト」のように3年間継続実施されてきたプロジェクトもあるが、高齢者を対象とする「呼吸法を用いた歌唱指導」や「音楽活動による地域貢献・地域交流」などの新規事業も含まれている。

京女ラウンドテーブルは、本事業最終年ということもあり、昨年に引き続き午前中に学生による活動成果発表、午後の教員を中心とした活動成果の発表の間に昼休みのランチセッションの形で実施した。出来るだけ参加機関の意見交換を活発にする工夫をしての開催であった。また終了後に本学教員、学生との懇親の時間を設定した。

本事業の実施によって、京都女子大学の地域・産学官連携活動は、量的にも質的にも飛躍的な進展を遂げることが出来た。地域連携研究センターを軸にした行政並びに産業界等との協定締結先は、2015年度は5件であったが、上記のように本事業開始後の2016年度には10件、2017年度4

件、2018年度5件、2019年度は7件と2015年度の地域連携研究センター開設以来の5年間の累計で35件に上る。2015年度までは東山区や東山区社会福祉協議会など協定締結機関の総数が6件であったことと比較すると、この間の連携拡充の努力の成果を理解することができるであろう。さらに、連携活動を通して構築してきた行政や企業・産業界との関係が、「女性のためのリカレント教育」という京都女子大学の新たなステージの展開に活かされることができた。「女性のためのリカレント教育」課程が開設されて本年でまだ2年であるが、行政や企業、産業界の協力を得て合同企業説明会の開催、企業向けリカレント教育説明の実施、さらにはボランティアでのキャリアカウンセリングなど、独自の就業

支援活動に取り組むことが出来た。また2019年度には厚生労働省「教育訓練プログラム開発事業(2年開発コース)」を受託することが出来たのも、地域連携研究センターの各界との緊密な連携活動が基盤にあったからこそである。

21世紀、大学は社会の一員として、地域社会および産業界と緊密な連携を構築しながら歩いていくことが求められます。「女性の生涯にわたる学びを支える大学」を目標に、京都女子大学の教育力向上とすべての女性の幸福に資するため今後も地域連携研究センターは活動を展開していく所存ですので、より一層のご支援をいただきますようお願いいたします。

市民×大学の連携活動事例

祇園新橋景観づくり協議会との連携

地域連携研究センター コーディネーター 家 績子

京都市大学補助事業「学まち連携大学促進事業」の一環として、2016年以来、当センターは、京都市内での地域連携活動を進めてきた。NPO法人京都景観フォーラムとの包括的な連携協定締結を機に、祇園新橋まちづくり部の定例会議に出席し、祇園新橋景観づくり協議会の発足をめざして協議を続けた。会議では、地域の将来を考える熱心な討論を経て、2017年3月に、伝統的な建物の維持・保全と、文化の共有と継承を主な目的とする地域景観づくり協議会の認定を京都市より受けた。

祇園新橋景観づくり協議会発足後、センターでは、主に以下の活動に参加、協力をし、今後も地域の景観の保全、風情や文化を守る活動の継続、発展に寄与していく。

1. 写真前撮りの課題への取り組み

最も京都らしい風情を残すスポットとして、この地域は、近年、結婚式の前期写真に人気の撮影ロケ地となっている。観光シーズンには、数メートルおきに、和装やドレスを着用したカップルや撮影クルーが並び、景観を損なうだけでなく、私有地に立ち入ったり、大声で話したりと住民の生活を脅かしたり、道路を占拠し安全面でも不安な状況になっていた。2017年6月に地域住民、NPO法人京都景観フォーラム、景観を考えるフォトグラファーズの会、京都女子大学現代社会学部の学生が協力し、撮影マナーの向上を訴えるちらしを配布するキャン

ペーンを実施した。このキャンペーンの様子はテレビ、新聞などマスコミにも取り上げられ、撮影マナーへの啓発を周知する効果があった。また、キャンペーン後には、この地で撮影する事業者が集まり、住民代表と話し合う機会が設けられ、撮影事業者会も発足した。午後の混雑する時間帯での撮影禁止、道路を占拠しての撮影の禁止、風情にそぐわない衣装での撮影禁止など景観と住民の生活を守る撮影への取り決めに賛同する事業者へ腕章を渡して識別するといった具体的取り組みが始動し、課題解決の方向性を模索している。

2. 観光マナー向上への取り組み

本学の中国からの留学生が、2019年5月には、地域の見学を行い、地域住民と、文化の相違によるマナーの捉え方の差異、外国人に効果的な注意の方法や海外での事例について討論した。また、教員がマナー向上を訴求するポスターや、リーフレットの中国語と英語への翻訳に協力するなど、景観保全やマナー向上への取り組みに携わっている。

3. 地域イベントへの学生と教職員の参加

連携活動入門を受講する学生が、継続して、白川の掃除や地域行事への参加を行っている。活動への参加をきっかけに、この地域を卒論のテーマに取り上げる学生もおり、地元の方々は、見学や取材を快く受け入れてくださっている。学生が、地域活動や京都の文化に触れる貴重な機会を得る一方で、地域からは、若い力の参加、協力に感謝を示されている。

東山区における高齢者のための地域福祉活動 —地方都市との比較から見える課題—

地域連携研究センターコーディネーター 岡崎 昌枝

京都女子大学地域連携研究センターは、「地域課題の共有化と協働」をコンセプトとして、自治体や企業・住民と協働して地域課題の解決に取り組んでいる。そのなかでも地域での活動は、東山区内において行われるものが多い。東山区との連携活動は、児童への学習支援と高齢者の地域活動支援に大きく分類される。2019年度の高齢者の地域活動支援は、祇園新橋景観づくり協議会や弥栄学区のすこやか学級、東山区シニアクラブと留学生の交流会、修道学区おかいもの便などであり、教職員・学生が地域の活動を支援した。これは、まさしく地域社会において高齢者への支援活動が必要とされていることを示すものでもある。

地域福祉活動は、住民が主体となり、ボランティア、NPOなどが行政による福祉サービスだけでは対応できない生活課題について取り組むものである。その活動において元気な高齢者が担い手の中心となる場合が多い。東山区の高齢者の地域福祉活動に1年足らずではあるが関わらせて頂き、担い手の高齢化や担い手不足などの問題が生じているとの問題意識を持った。筆者は香川県坂出市を地域調査のフィールドとしており、地域で暮らす高齢者の調査を実施してきた。坂出市の高齢化率は東山区に34%台と類似しており、地域福祉活動も活発である。本稿では2地区の高齢者の地域福祉活動を量的・質的調査によって実態を明らかにする。この比較調査によって課題を把握し、東山区の高齢者の地域福祉活動が継続・安定的なものになることを目指したい。

1. 東山区の地域特性と高齢者のための地域福祉活動

東山区は、京都市のなかで最も小さいながら、清水寺や祇園など有名な観光地をもつ行政区である。東山区は花街をもつ有名な観光スポットがある一方で清水焼を始めとする伝統工芸製造のまちであり、北部は商業地と工業地、南部は住宅地と東山区内の地域によってその地域特性に差異があり、地域社会で暮らす生活課題も多様である。観光地をつなぐ道路は狭く坂が多い。その両側には土産物店が立並び観光客が往来する。この地域特性は高齢者にとって買物や外出の不自由さを伴う。

東山区は京都市11区のなかで最も高齢化が進んでいること、女性の一人暮らしが多い点も特徴的であるといえる。2015年国勢調査において、東山区の39,004人(1980年比37.1%減)、高齢化率31.3%(1980年比15.5%増)、単身高齢世帯3,547世帯と人口減少・高齢化に直面していることが明らかとなった。高齢世帯や高齢単独世帯の増加は、家庭内の支えあいと地域社会の紐帯が弱体化する。東山区は都

市でありながら高齢化が進んできている「都市型高齢化地域」であるといえる。

2. 香川県坂出市の地域特性と高齢者のための地域福祉活動

香川県坂出市は、香川県の中央部に位置した人口53,164人(2015:国勢調査)の地方都市である。市の東部が高松市と隣接し北は瀬戸内海に島しょ部が点在し瀬戸大橋によって岡山県と繋がっている。産業は運輸業、製塩業で栄えてきたが、近年は製造業、サービス業に変わりつつある。市は12の藩政期のムラが地区としてそのまま残り、自治会・小学校校区、社会福祉協議会として市民生活に浸透している。市の中心部は、駅周辺に官公庁、病院、学校が集結している。そのため周辺に住宅地や商業施設も多い。沿岸部は製造業・運輸業や漁業、山間部は農業地域となっている。市郊外の平野部は農業地域に住宅地が建設された混住地域となっている。65歳以上人口は18,133人、高齢化率34.1%となっている。高齢夫婦世帯数1,751世帯、高齢単身世帯1,599世帯(単身世帯数の37.9%)である。高齢者の地域福祉活動として、地域包括支援センターが行う介護予防事業「はつらつ教室」と社会福祉協議会が行う居場所づくり活動としてふれあい・いきいきサロン「仲間づくり活動」がある。「はつらつ教室」は月1回各地区の公民館で開催、その担い手として坂出市が養成した介護予防サポーターがボランティアとして活動している。居場所づくり活動は住民が主体的に活動し社会福祉協議会が協力している。2014(平成26)年の活動登録数は100団体である。

表1 東山区と坂出市 対照表

	東山区	坂出市
人口	39,004	53,164
65歳以上の人口	12,238	18,133
高齢化率	31.3	34.1
高齢夫婦世帯	1,927	3,379
地域コミュニティ	元学区11	藩政期のムラ12

3. 調査方法

京都市

①京都市における市民主体の高齢者福祉活動の運営方法についての予備調査:地域包括支援センター(洛東園)を事例に高齢者の健康教室の実態を調査した。

②高齢者の地域福祉活動(すこやか教室及び居場所づくり)の実態に関する量的調査:調査対象は東山区内の全てのすこやか学級と居場所づくり活動。主な調査項目は、運営責任者・スタッフ、参加者、活動内容、地域社会の4点。調査票の配布は、東山区社会福祉協議会(以下、社協)の協力の

下、すこやか学級および健康教室については、学区社会福祉協議会の代表者会の際に調査の意図を説明したうえで配布。居場所づくり活動については社協より配布。回収方法はいずれの調査も本学地域連携研究センター宛に回答者からの直接郵送。配布数43通、有効回答数26通、全体回収率60.5%。

③量的調査結果から導き出されたすこやか学級と居場所づくり活動の特徴的な事例についての質的調査：4件の活動先に聴き取り調査を実施した。調査項目は、担い手、参加者、活動内容の3点である。

坂出市

①坂出市の介護予防事業についての予備調査：坂出市地域包括支援センターに介護予防教室の実態を調査した。

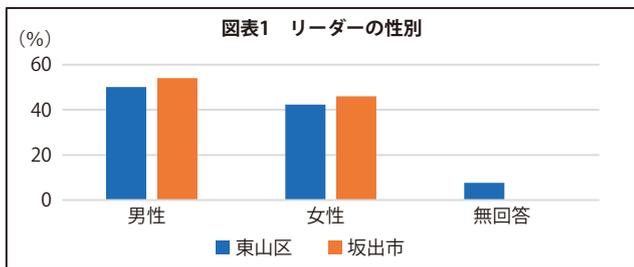
②坂出市の居場所づくり活動（ふれあい・いきいきサロン：仲間づくり活動）に関する量的調査：2014（平成26）年の仲間づくり活動一覧表および、仲間づくり活動報告書と計画書（2010～2013年）から活動実態を涉猟した。

③量的調査から特徴的な地域特性（市中心部、農村地域、島しょ部）地区の活動について質的調査：4件の活動先に聴き取り調査を実施した。調査項目は担い手、参加者、活動内容の3点である。

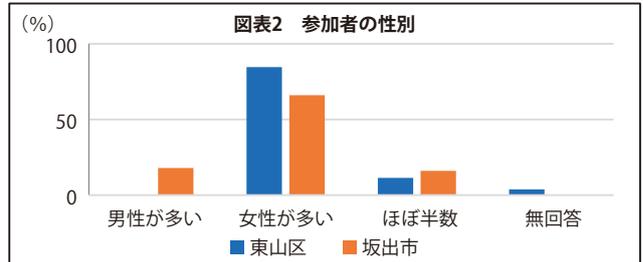
4. 調査結果

(1) 量的調査

リーダーの性別、参加者の性別、参加登録者数、参加者の変化、活動開催回数、活動場所、費用負担、活動参加者の居住範囲について比較した。

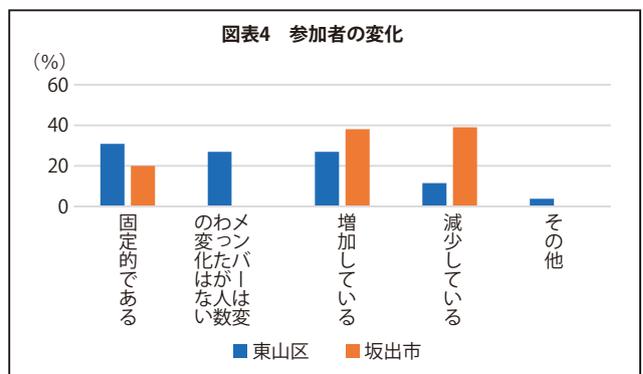
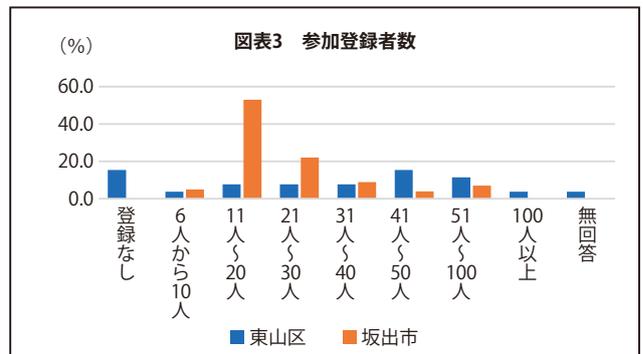


リーダーの性別は、ともに男性の活動責任者（東山区：50%、坂出市：54%）が多くなっていた（図表1）。坂出市は男性のみ女性のみのグループが多いため女性のリーダーも多い結果であった。坂出市は「リーダーの変更がない」が57%であり、東山区もリーダーの就任年数10年以上が30.8%であったことから、高齢者の地域福祉活動においてリーダーの変更の難しさが見られた。



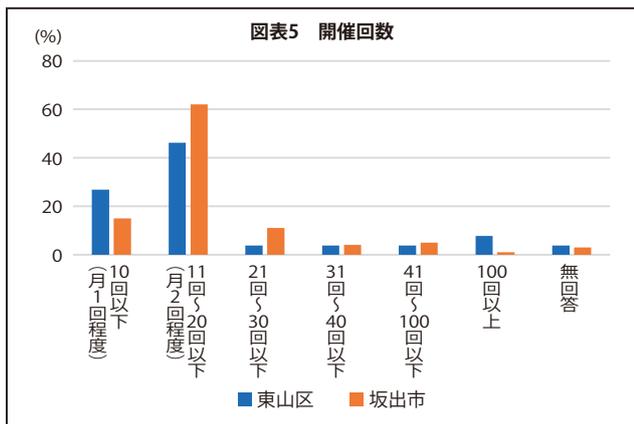
参加者の性別は、東山区（女性が多い：84.6%）も坂出市（女性が多い：66%）も参加者は女性の方が多かった（図表2）が、坂出市は男性のみの団体が複数あり、ペタンクやゲートボール、地域の公共の場の清掃、休耕田を活用した花や芋の栽培などの活動がみられた。

参加登録者数は、東山区が41人以上の比較的大きな規模（41～100人：26.9%）、参加者を限定していない（登録なし：15.4%）であるのに対し、坂出市では30人までの活動（6～30人：65.7%）と小規模であった（図表3）。坂出市では、対象となる集落の高齢者を全てメンバーとすることにより登録者数が多くなっている団体もみられた。

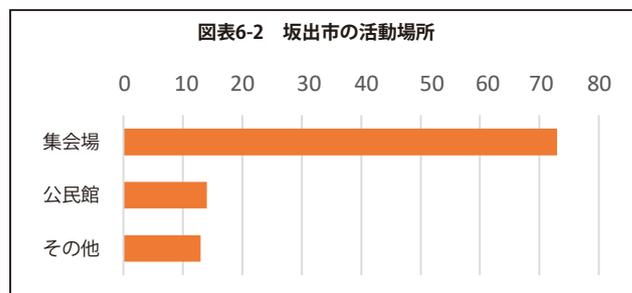
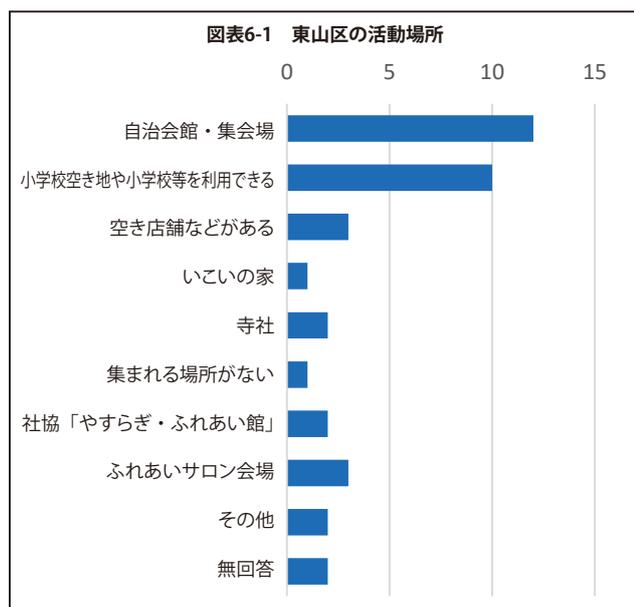


参加者の変化について、固定的と回答した割合は坂出市よりも東山区が10%以上（東山区：30.8%、坂出市：20%）高かった。坂出市は増加・減少ともに高く、東山区とは増加約11%、減少27.5%の差がみられた（図表4）。東山区は参加者が増加もしくは変更しながら維持できているのに対し、坂出市は参加者が増加している団体と減少している団体ともに

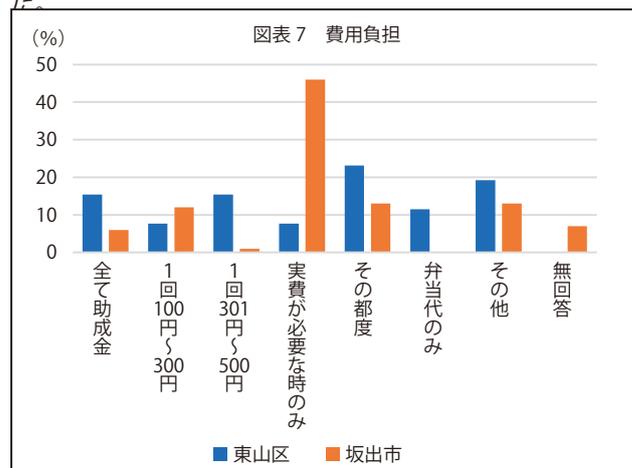
東山区より多い。東山区は活動の規模を元学区で1つの団体としているため登録者も多く、65歳を超えた方に参加を働きかけるため固定的、メンバーが変化しても人数が維持できているが、坂出市は小規模であるため増加や減少の変化が生じやすい。



年開催回数は、東山区・坂出市ともに11〜20回(東山区:46.2%、坂出市:62%)の開催が多かった(図表5)。東山区では10回以下の開催が坂出市よりも11.9%高く、その背景には暑い8月と秋の行事が多いときを活動休止として年10回としている団体が多かったことが挙げられる。東山区・坂出市ともに活動回数に応じて補助金等が支払われる制度となっているため、各団体とも検討を重ねた上で開催回数を決定していた。

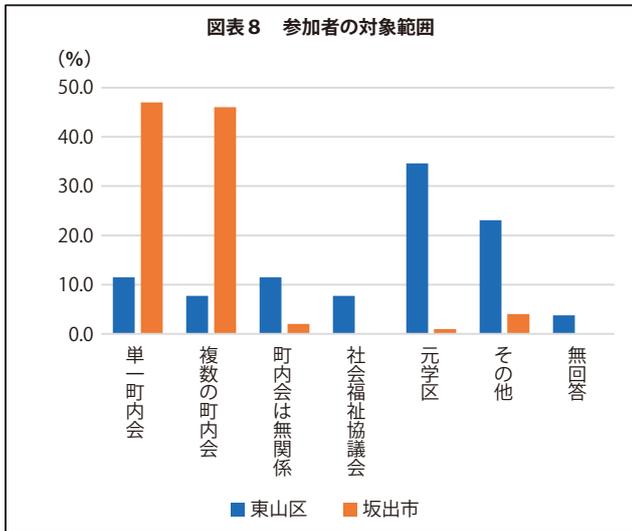


東山区は活動場所として、小学校の活用(10件)が多く、空き店舗やふれあいサロン会場、児童館等がみられた(図表6-1)。坂出市では、集会場や自治会館(73件)、公民館(14件)、寺社や出荷組合等もみられた(図表6-2)。東山区では小学校の統合が行われ、その空き校舎を複数の団体が有効に活用、そのなかにふれあいサロン会場も確保している。坂出市では各集落が有している集会場や自治会館が多かった。



参加者の費用負担は、東山区・坂出市ともに、助成金に加えて、その都度・実費と活動内容に合わせて費用を徴収していた。1回の費用として東山区「301〜500円」15.4%、坂出市「100〜300円」12%と東山区に若干高い傾向がみられた(図表7)。

活動対象範囲は、東山区では元学区(34.6%)での活動が多いが、坂出市ではコミュニティの地区よりも小さい町内会(単一町内会47%、複数の町内会46%)レベルでの活動範囲となっている(図表8)。東山区は元学区を基本の活動範囲としていたのに対し、坂出市は町内会を基本の活動範囲として、隣接する複数の町内会と活動する形態をとっていた。



(2) 質的調査

それぞれの特徴的な事例について質的調査を行った。調査項目は①担い手、②参加者、③活動内容の3点について整理をした。

東山区は①ともいき食堂(粟田学区)、②新道健康すこやか学級(新道学区)、③小松谷児童館(修道学区)、④貞教学区の取組み(貞教健康すこやか学級、しあわせの森、貞教サンデーモーニング)である。坂出市は、①王越地区(農村地域)、②中央校区(市中心部住宅地)、③与島地区(島しょ部)④松山地区(農村地域)である。

東山区

①ともいき食堂(粟田学区)

[担い手] スタッフとボランティアの2名

[参加者] 地域年齢制限なし。幅広い年齢層

[活動内容] 回数: 月1回、場所: 会社を開放、周知方法: チラシ等の他SNS、プログラム: 食事を準備し調理は参加者、食後レク

[特徴] 少ないスタッフで運営できるメニュー、メニューによる参加者の偏り。SNSの活用による参加者の増加、商店街との良好な関係の構築

②新道健康すこやか学級(新道学区)

[担い手] 学区内の民生委員や学区社協のメンバー、社会福祉協議会と民生委員のスタッフ

[参加者] 新道学区の65歳以上の方、(登録制)

[活動内容] 回数: 月1回、カフェ月1回計2回、場所: 元新道小学校、周知方法: 年度初め案内と次回周知、プログラム: 食事と体操、レクもしくはモノづくり

[特徴] 高齢者の外出の機会の増加を目的として活動は

無理せず実施している。

③小松谷児童館(修道学区)

[担い手] 児童館の職員と学童保育の子ども

[参加者] 地域の高齢者と児童の保護者等

[活動内容] 回数: 月1回、場所: 児童館、周知方法: 広報誌とポスティング、プログラム: 喫茶の提供

[特徴]: こどもが喫茶業務を担当し、教育的な視点もある。児童館の周知にも繋がっている。地理的・建築ともにバリアがある。

④貞教学区の取組み(貞教健康すこやか学級、しあわせの森、貞教サンデーモーニング)

【貞教健康すこやか学級】

[担い手] 社会福祉協議会スタッフ

[参加者] 貞教学区住民の参加

[活動内容] 回数: 月1回、場所: ふれあい・いきいきサロン、周知方法: 年度初め案内と次回周知案内、プログラム: 体操、食事、レク

[特徴] 安く利用できるので参加者が多い。貞教地区は複数の活動について世代を超えて協力しているため多くの住民に認知してもらえている。

【しあわせの森】

[担い手] 個人

[参加者] 少数固定化

[活動内容] 回数: 月3回、場所: 個人宅、周知方法: 自宅前に看板、プログラム: 特に決めていない。

[特徴] 無料で近所つき合いの延長、参加者が楽しみにしてくれる。

【貞教サンデーモーニング】

[担い手] 貞教地区各種18団体から各5名のスタッフを選出し輪番制

[参加者] 貞教地区内外問わず、多く参加

[活動内容] 回数: 月1回、場所: ふれあい・いきいきサロン、周知方法: 学区掲示板、プログラム: 喫茶の提供

[特徴] 輪番制による負担軽減、多くの活動により住民に認知してもらえる。

坂出市

①王越地区(農村地域)

[担い手] 老人会代表(男性)

[参加者] 複数の町内会の男性、男性のみ

[活動内容] 回数: 月1回、年12回。場所: 集落の集会場、公園。周知方法: 年間で日程が確定、声かけ。プログラム: ペタンク、公園などの清掃・草ぬき等

[特徴] 地域内の男性によるペタンク(ボールを投げあつ

て得点を競うゲーム)が活動の基本となっている。自分たちが普段使う公園や道路の環境整備をしている。

②中央校区(市中心部住宅地)

[担い手]元自治会長(男性)

[参加者]ほぼ半数

[活動内容]回数:月2回、場所:町内にある自治会館。周知方法:年間で日程が確定、声かけ、プログラム:園芸、花見、カラオケ、食事会、各参加者が講師となって勉強会等

[特徴]自治会館がある公園の清掃・整備を行っている。周辺に飲食店も多く散歩と食事を組み合わせることも多い。参加者が順番で得意分野の講話をしている。

③与島地区(島しょ部)2か所

[担い手]民生委員(女性)とボランティア

[参加者]島内の高齢者(女性のみ)

[活動内容]回数:月1回、合わせて月2回。場所:公民館分館、周知方法:年間で日程が確定、声かけ。プログラム:レクリエーション後に食事を提供。それぞれレクリエーションが異なる。

[特徴]島しょ部で一人暮らし女性の高齢者が多く、食事を提供し、健康状態を把握している。2つの活動を実施することで定期的な安否確認ができる。

④松山地区(農村地域)

[担い手]神谷神社 宮総代が代表。

[参加者]神社当番と自治会役員(2年に1度改選)

[活動内容]回数:月2回、場所:神谷神社、周知方法:年間で日程が確定、プログラム:神社までの参道の清掃、木の剪定、花を生ける、公園のトイレ掃除など神社に関する整備する。

[特徴]地域の文化財の整備を高齢者の地域活動に結びつけ輪番制による住民全体の取り組みである。

5. 考察

高齢者の地域福祉活動では担い手不足、担い手の高齢化が課題として取り上げられることが多い。京都市東山区の調査結果では担い手が70歳以上61.5%と高齢化している現状がみられ、香川県坂出市の調査においても高齢化による活動の休止などもあることが報告されていた。担い手の高齢化は現実問題として迫ってきており、この問題解決のための方策として各団体とも活動プログラムを工夫していることがわかる。東山区のすこやか教室の多くは、学区ごとに社協スタッフが担い手となって、開催回数を月1回程度とすることで回数とプログラムの均一化を図っており、担い手の負担軽減となっていると思われる。坂出市の活動の多くは、集落単

位で行われる小地域での活動に担い手も参加者も皆仲間というスタンスで活動を行っている。負担の少ない活動内容の設定や担い手と参加者の役割分担を緩やかにすることによって担い手不足を軽減できているのではないかと考える。

高齢者が地域福祉活動に参加することにより、交流や運動の機会が増加し介護予防につながると言われている。東山区では参加者規模が大きく、担い手と参加者の役割が分かれている活動が多かったのに対し、坂出市では小規模で役割も緩やかであった。小規模の活動はメンバーで意見を出し合い活動を決定するため、活動が活発になると参加者は増加し、活動が低下すると参加者は減少する。一定の参加者が登録していることは安定した活動を行うための要件のひとつとなるであろう。反面、小地域での活動は高齢者自ら移動し参加することができ、身体機能の維持につながる。活動の地域範囲や参加者数の設定は、地域の状況に応じて検討していくことが望ましい。

東山区の活動プログラムの多くは、連携先の方々による講話やレクのアート、食事が提供される形態が多く、費用負担も坂出市より若干高かった。坂出市で食事が毎回提供される活動は島しょ部で行われている活動で、高齢者の安否確認・健康維持の目的が強かった。参加者にとって食事の提供は楽しみであり、食事を提供することで参加者が見込めるという効果も期待できるのではないかと考える。坂出市は一緒に外食したり弁当を食べるなかで仲間と集う形態となっているため、活動回数も比較的多く設定することが可能であり、周知も普段の声かけで十分可能であるのかもしれない。

おわりに

東山区における高齢者の地域福祉活動は、各団体ともに組織体制が整い、元学区を基本として小学校跡地等を活用した活動場所を確保し、複数の組織と連携していた。この調査を通して活動の継続には、担い手に負担がない活動内容の工夫と小地域・少人数による仲間との交流が図れる活動が組み合わされることが望ましい。どの地域においても運営スタッフの高齢化は進行しており、活動の継続には常に活動を見つめ直し工夫していく必要があるといえる。

今後は、この調査結果を地域の福祉活動実践者と共有し、東山区の高齢者のため地域福祉活動が安定的に継続できるよう微力ではあるが支援していきたい。

参考資料

- 1) 厚生労働省: これからの地域福祉のありかに関する研究会報告書(2008) URL: <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0331-7.html>
- 2) 国勢調査(2015)

女性地域リーダー養成プログラム 2019年度開講科目一覧

2017年度から開講している女性地域リーダー養成プログラムは、地域課題の発見能力、問題解決能力、実践力を備えた地域リーダーとなりうる女性の養成を目的としている。2019年度からは、副専攻プログラムとして開講した。

科目名	担当者	開講期間	概要
連携活動入門	竹安 栄子	後期 / 火 2	連携活動事始め～連携活動にチャレンジ～ 連携活動に従事するにあたって、知っておくべき基礎的な事項や身につけておくべき倫理事項、さらに多様な連携活動の実態について講義する。
地域連携講座B1	各地方自治体 (中道 仁美)	前期 / 火 3	地方自治体の取り組みを学ぶ 大学が就職協定している行政の担当者から各県の現状と施策を学び、地域社会の担い手として女性が果たす重要性を理解する。11県の地方自治体担当者が授業を担当。
地域連携講座B2	京都市・京都市の企業及び団体 (竹安 栄子)	前期 / 月 2	京都の社会と連携活動 行政や企業、各種組織の実務担当者をゲストスピーカーとして招き、それぞれの分野からみた京都の社会や産業の実態を講じてもらうオムニバス形式の授業。京都市の姿と京都市が直面する課題を多角的視点から理解し、かつ課題解決に向けて学生自身が地域貢献活動に主体的に取り組むよう学生の行動を促進することを目的としている。
産学連携講座A1	株式会社三井住友銀行 (寄附講義)	後期 / 水 2	持続可能な社会の実現を果たす民間金融機関の役割 三井住友銀行とそのグループ会社での事業内容を素材にその仕組みを解説しつつ今後の社会生活や資産形成に必要な知識を習得する。
産学連携講座A2	野村證券株式会社 (寄附講義)	後期 / 木 4	基礎知識としくみの理解 激変する日本の資本市場の全容と投資のリスク&リターンの考え方、株式投資・債券投資・ポートフォリオ運用・外国為替相場など証券投資における重要テーマを解説する。
産学連携講座A3	阪急電鉄株式会社 (寄附講義)	後期 / 金 4	民営鉄道事業と地域社会 阪急電鉄グループの事業内容を素材に、地域や市民生活にどのように関わり、その発展に寄与してきたかを解説する。
産学連携講座B1	株式会社朝日新聞社 (寄附講義)	前期 / 火 5	新聞を通じて現代社会の諸問題について理解を深め、社会に対する問題意識を養う 現役の新聞記者が様々な社会問題をテーマに複数回講義する。また、当日の新聞を使って社会の問題を考える。学生は各々の意見を小論文として提出し、講師が添削する。
産学連携講座B2	大阪ガス株式会社 (寄附講義)	前期 / 木 3	エネルギーを通してみる社会変化と環境対策 ガス・電気の基礎知識、国のエネルギー施策、時代背景等について解説しながら、身近なエネルギーから環境問題、社会情勢について考える機会とする。
産学連携講座B3	連合京都・京都中小企業家同友会・京都信用金庫 (寄附講義)	前期 / 水 2	女性が働くということ・働く者の権利を学ぶ 労働組合や企業、各種組織の実務担当者をゲストスピーカーとして招き、それぞれの分野からみた働くことに必要な基礎知識について学ぶ、オムニバス形式の授業。
連携課題研究	桂 まに子	通年集中講義	連携課題を発見し、情報技術を用いた問題解決策を考える デジタル時代に地域や企業が抱える連携課題について考え、研究テーマを決めて、情報技術 (Wikipedia、OpenStreetMapなど) を活用した問題解決を図る。
連携課題研究	京都信用金庫 (寄附講義)	通年集中講義	女性起業家と考える、「創業しやすい京都」 京都で活躍する女性起業家との対話や、事業の見学・体験といった場を通して「京都で創業するうえでの課題」を発見し、「創業しやすい京都」とはどのようなものかを考察する。
連携課題研究	宮原 佑貴子	通年集中講義	京都の伝統的染織産業の技術を体験し、現代に活かす 京都の伝統的地場産業である着物染織の高い技術を自ら体験し、知識を深め、それらの魅力を広く伝える手法を考え実践する。

連携活動入門

《竹安 栄子》

連携活動事始め～連携活動にチャレンジ～

授業の到達目標

1. 連携活動の社会的意義について理解する。
2. 連携活動の基礎知識を身につける。
3. 連携活動への従事が自分の成長を促すものであることを体験する。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 連携活動とは?—なぜ今、求められているのか。
- 第3回 地域社会の仕組み1—多様な概念
- 第4回 地域社会の仕組み2—地域社会の構造
- 第5回 人口減少社会と地域社会の課題
- 第6回 地域社会としての京都1—現状と課題
- 第7回 地域社会としての京都2—京都の町内会
- 第8回 京都女子大学の連携活動
- 第9回 多様な分野の連携活動
- 第10回 企業に求められる社会的責任
- 第11回 連携活動に必要な倫理的配慮
- 第12回 連携活動の実践1
- 第13回 連携活動の実践2
- 第14回 実践体験報告
- 第15回 全体のまとめ

地域連携講座B1

《各地方自治体(中道 仁美)》

地方自治体の取り組みを学ぶ

授業の到達目標

21世紀になって人口減少局面に突入した日本において、多くの自治体が人口構造の急激な変化に対応すべき努力を続けている。本講義は就職協定を締結している11の自治体の行政担当者がリレー講義をおこなうことにより、以下の能力を養成することを目的としている。

1. 現代社会の現状と課題を研究する。
2. 地域に関する現状と施策を理解する。

3. 地方自治体の行政を学ぶ。
4. 論理的な思考を磨き、意見・考えを文章にする。
5. 自ら活動する方法を学ぶ。

授業計画

1. イントロダクション:オリエンテーション:授業の進め方
2. 広島県による講義
3. 石川県による講義
4. 岡山県による講義
5. 滋賀県による講義
6. 鳥取県による講義
7. 香川県による講義
8. 静岡県による講義
9. 山口県による講義
10. 島根県による講義
11. 富山県による講義
12. 高知県による講義
13. 三重県による講義
14. 福井県による講義
15. 総括:地方の課題と女性:レポート作成

地域連携講座B2

《京都市・京都市の企業及び団体(竹安 栄子)》

京都の社会と連携活動

授業の到達目標

1. 地域社会としての京都の実態を理解する。
2. 京都を事例として、現代の日本の地域社会が抱える課題を理解する。
3. 地域社会の多角的側面を理解する。
4. 行政をはじめとした各種分野の実態を理解する。
5. 地域社会が市民の力で成り立っていることを理解する。
6. 学生が地域社会の構成員として行動することが社会から期待されていることを理解する。

授業計画

- 第1回(4/8)イントロダクション(竹安):
本講義の概要や目的など受講に当たって理解しておくべき事項について解説する。
- 第2回(4/15)京都市役所
京都市の人口・世帯、産業など京都市の概要と京都市役

所の役割について講じる。

第3回(4/22)東山区役所

市役所と区役所の役割の違い、東山区の地域特性、東山区が直面している課題などについて区役所の担当者が講義する。

第4回(4/29)NPO京都景観フォーラム

世界から称賛される京都の景観がどのようにして維持されているのか、だれの手によって保全されているのか、現場の経験に基づいて解説する。

第5回(5/13)京都刑務所

「負の回転ドア」という表現に象徴されているように、日本の犯罪者の半数が再犯者に扱って占められている。なぜ犯罪を繰り返すのか、それを解消するには市民として何を必要があるのか、刑務所で犯罪者の更生に尽力する刑務官による講義。

第6回(5/20)京都保護観察所

刑務所に入るほどではない軽微な犯罪を犯した青少年や刑期を終えて刑務所を出所した人たちの生活と更生を支える制度を更生活動の最前線で日々努力する人たちの声を通して学ぶ。

第7回(5/27)東山区社会福祉協議会

高齢化率33%という東山区の高齢者の生活実態を、社会福祉の最前線の実務家から学ぶ。

第8回(6/3)京都市中央卸売市場

「京の台所」を支える中央卸売市場の機能と役割を学ぶ。

第9回(6/10)招徳酒造

京都の伝統的地場産業の一つである酒造業。なかでも伏見の酒造りについて、その歴史から現状を学ぶと共に、現在酒造メーカーが直面している課題について話を聞く。なお、招徳酒造は伏見の酒造メーカーの中で唯一の女性杜氏の蔵である。

第10回(6/17)ハイアットリージェンシー京都

世界に展開するグローバルホテルであるハイアットリージェンシー京都の総支配人による講義。グローバル企業としてのハイアットの理念から「京都」のハイアットとしての特徴をどのように経営に生かしているのか、さらにグローバル企業から見た京都の観光について話を聞く。

第11回(6/24)京都銀行

地方銀行と都市銀行の違いから始まって、地方銀行が地域経済に果たす役割について実務家が講義する。

第12回(7/1)朝日新聞社

全国紙と地方紙の違い、新聞が地域社会に果たす役割など、記者の目から見た地域社会について現職の記者

が講義する。

第13回(7/8)京都中小企業家同友会

京都経済は地域に蓄積された数多くの中小企業によって支えられている。1500近い会員を擁する京都中小企業家同友会から京都の企業の実態を講義してもらう。

第14回(7/15)本学進路・就職部長・京都ジョブパーク

本学学生の就職状況あるいは就活の現状を通して京都の産業を考える。

第15回(7/22)京都女子大学の連携活動と総括

京都女子大学が取り組んでいる地域貢献活動について解説する。

産学連携講座A1

〈株式会社三井住友銀行(寄附講義)〉

持続可能な社会の実現を果たす民間金融機関の役割

授業の到達目標

- ・金融グループの役割と国内外の社会環境についての理解
- ・受講者自身の今後の資産形成に必要な知識の習得

授業計画

1. オリエンテーション
2. 金融業界について
3. 三井住友銀行の業務① 銀行の3大業務／当行各部の業務内容紹介①
4. 三井住友銀行の業務② 当行各部の業務内容紹介②／京都女子大OG講話
5. 身近なお金の話 人生の3大資金／ライフプランについて
6. 証券会社って? 証券会社の業務内容と金融商品の基礎
7. 身近なお金の話 万が一が起こった際のお金／遺言信託とは?
8. 信託って? 信託銀行の業務内容紹介／超富裕層と信託
9. これまでのまとめ 重要ポイント解説
10. 運用とは? 資産形成を考えるための「はじめ」の知識
11. リースって何? 身近なリース商品とその役割
12. 色々なカードについて クレジットカードの利便性と注意点
13. ローンについて ローンとの上手な付き合い方

14. 三井住友銀行の最新の取組 | ITを活用した取組
15. 総論 まとめ

産学連携講座A2

≪野村証券株式会社(寄附講義)≫

基礎知識としくみの理解

授業の到達目標

証券・金融市場関連のテーマを中心とする講義を通じて、社会・経済の動向に関する見聞を広め、今後の社会生活や資産形成の際に必要な知識を習得する。

授業計画

- 第1回: ガイダンス
第2回: ライフプランニングとNISA
第3回: 経済情報の捉え方
第4回: 金融資本市場の役割とその変化
第5回: グローバル化する世界と資本市場の果たす役割
第6回: 証券投資のリスク・リターン
第7回: ポートフォリオ・マネジメント
第8回: 株式市場の役割と投資の考え方
第9回: 債券市場の役割と投資の考え方
第10回: 外国為替相場とその変動要因について
第11回: 投資信託の役割とその仕組み
第12回: 資本市場における投資家心理
第13回: 日本の株式市場史
第14回: 産業発展と投資の考え方
第15回: まとめ

産学連携講座A3

≪阪急電鉄株式会社(寄附講義)≫

民営鉄道事業と地域社会

授業の到達目標

阪急電鉄及び阪急沿線を題材に、鉄道以外の幅広い事業を営む民営鉄道事業の特徴を知るとともに、鉄道会社が沿線地域の発展や沿線の方々々の生活向上に果たしてきた役割を踏まえて、地域社会の成り立ちや発展について学ぶ。

- 1) 京阪神地域の社会や文化についての理解
- 2) いわゆる「私鉄」が沿線地域に果たしてきた役割についての理解

- 3) 受講者自身の今後のキャリアについての考察

授業計画

- 1 阪急沿線について(現在の阪急沿線の紹介)
- 2 鉄道業界における民営鉄道の特徴と小林一三(沿線の開発と様々な事業への取り組み)
- 3 マルーンカラーと阪急らしさ(阪急電車の特徴、神戸線沿線の発展)
- 4 梅田の発展(梅田「阪急村」、ターミナルデパート、エリアマネジメント)
- 5 街の発展と駅・鉄道(駅の工夫、街における駅の役割、立体交差化事業)
- 6 駅の利便性(駅ナカ・駅ソト小売事業、広告事業)
- 7 西宮北口の発展(「関西で住みたい街No.1」のなりたち、阪急西宮ガーデンズ)
- 8 小林一三とレジャー事業(宝塚歌劇、遊園地、プロ野球)
- 9 宝塚歌劇の発展と地域との共生(宝塚大劇場、ベルばら、手塚治虫)
- 10 阪急沿線における住宅事業(分譲住宅地の開発から都心型マンションまで)
- 11 街におけるホテルの役割(地域のランドマーク的役割から宿泊特化型ホテルまで)
- 12 事業組織の運営・管理(本社部門の業務)
- 13 子育てしやすい社会・街づくり(学童保育事業への取り組み、女性の働き方)
- 14 社会貢献活動(社会貢献プログラム「ゆめまちプロジェクト」)
- 15 これからの阪急@京都(事業の企画、仕事への活かし方)

産学連携講座B1

≪株式会社朝日新聞社(寄附講義)≫

新聞を通じて現代社会の諸問題について理解を深め、社会に対する問題意識を養う

授業の到達目標

- 1) 新聞を通し情報リテラシーを高める。
- 2) 社会の問題について「自分の意見を持つ」姿勢を身につける。
- 3) 社会で求められる「書く力」「伝える力」を養う。

授業計画

- 第1回: メディアの特徴、新聞の役割、記者活動とは

- 第2回：新聞の読み方、各紙比較
- 第3回：文章の書き方①(作文作成)
- 第4回：文章の書き方②(作文講評)
- 第5回：記者講義①貧困問題
- 第5回：小論文作成(800字、60分)
- 第6回：小論文の講評、議論
- 第7回：記者講義②難民問題
- 第8回：小論文作成(800字、60分)
- 第9回：小論文の講評、議論
- 第10回：記者講義③労働問題
- 第11回：小論文作成(800字、60分)
- 第12回：小論文の講評、議論
- 第13回：読者投稿欄「声」編集長講演
- 第14回：政治と選挙、世論調査
- 第15回：講義まとめ

産学連携講座B2

《大阪ガス株式会社(寄附講義)》

エネルギーを通してみる社会変化と環境対策

授業の到達目標

電気・ガスを中心にエネルギーを通じて、日本・世界の抱える環境問題や社会情勢に関する見聞を広め、今後の社会生活に必要な知識を習得する。

授業計画

- 第1回：関西のガス事業の歴史
- 第2回：都市・地域・住まいとエネルギー
- 第3回：天然ガスの調達について
- 第4回：世界における天然ガス利用等の概況(小テスト)
- 第5回：都市ガスの製造と供給の概要
- 第6回：ガス事業者による保安の取組み
- 第7回：大阪ガスのDNAと家庭用機器開発
- 第8回：ガス事業者のPR戦略(小テスト)
- 第9回：日本のエネルギー政策について
- 第10回：ガス事業者の電力事業の概要について
- 第11回：温暖化対策に向けた世界の動向と日本の政策
- 第12回：ガス事業者の温暖化対策の取組み
- 第13回：住まいとエネルギー
- 第14回：コミュニティーと文化
- 第15回：エネルギー会社と地域共創(小テスト)

産学連携講座B3

《連合京都・京都中小企業家同友会・京都信用金庫(寄附講義)》

女性が働くということ・働く者の権利を学ぶ

授業の到達目標

1. 働く上で知っておくべき基礎知識を習得する。
2. 働く楽しさや労働環境の実態を学ぶ。
3. 将来働くことに備えて、職業や企業を選択できる力を養う。

授業計画

- 第1回 インTRODクシヨソ
担当教員と連合京都橋元会長
連合京都の会長を招き、本講義の概要や目的など受講に当たって理解しておくべき事項について、担当教員とともに解説する。
- 第2回 労働者の権利を知る
連合京都から講師を招き、労働者の権利について基礎的な用語や労働法について学ぶ。
- 第3回 雇用における男女平等とハラスメント
連合京都から講師を招き、女性を取り巻く状況やハラスメントについて理解する。
- 第4回 ワーク・ライフ・バランスとは
連合京都から講師を招き、労働時間短縮にむけた取り組みや仕事と家庭の両立について学ぶ。
- 第5回 働くことを軸とする安心社会に向けて
連合本部から講師(連合会長を予定)を招き、働くことと安心社会構築の関係について学ぶ。
- 第6回 労働相談の事例から学ぶ
連合京都から講師を招き、労働相談の複数事例から学ぶ。
- 第7回 職場の現状と課題(旅客・運輸業)
旅客・運輸業の現場から講師(JR連合を予定)を招き、産業の特色と職場の状況について理解する。
- 第8回 職場の現状と課題(金融業)
金融業の現場から講師(生保労連を予定)を招き、産業の特色と職場の状況について理解する。
- 第9回 職場の現状と課題(製造業)
製造業の現場から講師(電機連合を予定)を招き、産業の特色と職場の状況について理解する。
- 第10回 職場の現状と課題(小売業)
小売業の現場から講師(UAゼンセンを予定)を招き、産業の特色と職場の状況について理解する。

第11回 公務職場の現状と課題

公務員の現場から講師(自治労)を招き、職場の特色と職場の状況について理解する。

第12回 金融業で働く

京都信用金庫から講師を招き、地方金融業で働く女性の働き方について学ぶ。

第13回 女性経営者として働く

東山中小企業家同友会から講師を招き、女性経営者の働き方について学ぶ。

第14回 京都の労働者の状況と相談窓口

連合京都から講師を招き、京都の労働者の状況やオール京都の体制で取り組まれている若者の就労支援の実情について理解する。

第15回 全体のまとめ

これまでのアンケート・質問への答えや説明、担当教員による総括

10. 中間報告(ミニプレゼンテーション、ディスカッション)

11. プロジェクト実行

12. プロジェクト実行

13. プロジェクト実行

14. 研究レポートの作成

15. 発表

連携課題研究

≪京都信用金庫(寄附講義)≫

女性起業家と考える、「創業しやすい京都」

授業の到達目標

- ・京都における「地域経済」についての見識を深める。
- ・「創業」をテーマとしたエコシステムについて「気付き力」「考える力」を養う。
- ・人生の選択肢として、「就職」と「創業」についての理解を深める

授業の計画

第1回(4月10日5時間目)

オリエンテーション ～本講義の流れについて～

第2回(4月17日5時間目)

京都信用金庫における創業の取組

第3回集中講義①(8月5日1～4時間目)

「京都における企業の実例」

第4回: //

第5回: //

第6回: //

第7回:集中講義②(9月4日1～4時間目)

「事業所訪問による発見課題とソリューションの中間発表」

第8回: //

第9回: //

第10回: //

第11回:集中講義③(9月11日1～4時間目)

「起業家への提案発表」

第12回: //

第13回: //

第14回: //

第15回(10月16日5時間目)

最終報告:「創業しやすい京都」

連携課題研究

≪桂まに子≫

連携課題を発見し、情報技術を用いた問題解決策を考える

授業の到達目標

- ・研究テーマに関する情報収集
(文献、ウェブ、現地、関係者など)
- ・情報技術を用いた編集・発信
(Wikipedia、OpenStreetMapなど)
- ・自ら発信した経験をもとに、連携活動を進展させるための提案を行う

授業の計画

1. オリエンテーション:ProblemBasedLearningについて(4月11日5講時)
2. 地域や企業との連携課題について整理する(ディスカッション)
3. プロジェクト準備(連携課題テーマの設定、情報収集)
4. Wikipediaを用いた地域情報の編集・発信について
5. OpenStreetMapを用いた地域情報の編集・発信について
6. プロジェクト設計(ミニプレゼンテーション、ディスカッション)
7. プロジェクト実行
8. プロジェクト実行
9. プロジェクト実行

連携課題研究

〈宮原 佑貴子〉

京都の伝統的染織産業の参加体験型課題研究

授業の到達目標

- ・京都の伝統的染織産業の技術と背景についての知識を得る。
- ・染織技術を体験し、固有の魅力や特色について知る。
- ・参加体験型のイベントを計画し実施する。
- ・個人テーマをもって、自主的に取材調査を進め、課題に応じたプランの構想をおこなう。

授業計画

1. オリエンテーション: 京都の伝統染織産業と京都女子大学の取り組み
2. 工房訪問
3. 工房訪問
4. 連携課題の整理と分析
5. 参加体験型イベント(ターゲットの設定、手法についての計画)
6. 参加体験型イベント(実施計画、プロモーション計画)
7. 個人テーマのためのリサーチ発表
8. 参加体験型イベント(準備、ロールプレイング)
9. 参加体験型イベント(プロモーション)
10. 参加体験型イベント(開催の設営)
11. 参加体験型イベント(実施)
12. 参加体験型イベント(参加者への調査、聞き取り)
13. 調査結果のまとめ、分析
14. 個人テーマに沿った提案書制作
15. プレゼンテーション、合評、ディスカッション

○授業後の学生の感想から、「学部の専門知識に加えて学ぶことで、視野が広がった。」「地域活動や大学のある京都について現状把握ができ、課題解決の必要性を実感した。」「企業を知ることができて就職活動に役立だった。」など授業を評価する声を読み取れる。

受講後の感想(授業アンケートより抜粋)

- ・京都の企業について知る機会を得て良かった。また、京都女子大学の就職支援についても授業で知ることができ、しっかりと活用していきたいと思う。(現代社会学部 3回生)
- ・京都女子大学出身の先輩たちが、社会に出て活躍する

様子を聞いたのは、今後のキャリアを考えるうえで、有意義だった。(文学部 2回生)

- ・企業の社会貢献活動とはどんなことなのかあやふやだったが、授業を受けて理解できた。企業の社会貢献活動を学ぶことがその企業を知るひとつであることに気づいたのは大きな学びだった。今後、「自分はどう生きたいのか。」「どう能力をいかせるか。」を考えて、企業への就職をしたいと思う。(文学部 2回生)
- ・京都でも少子高齢化が、危機にあるとは知っていたが、数字を示されて改めてその深刻さを痛感した。「どうにかなる。」と人ごとにするのではなく、課題としてしっかり考えていく必要があると思った。(発達教育学部 2回生)
- ・まちづくりは、そこに住む人たちの努力で成り立っていることを知った。私たち大学生にもできることがあり、課題を考えていかなければならないと思った。(文学部 2回生)
- ・授業を受けることで、「なんでもやってみよう。」とポジティブな気持ちで、地域活動に飛び込むことが大切だと思った。京都にある大学に通っていても知らなかった京都の古い街並みや景観を守るために、地域の方々が努力されている様子を知ることができた。(家政学部 1回生)
- ・地域連携活動の授業は、私たち大学生の地域に対する意識を変えることができるため、各大学がもっと取り入れていくべきだと考える。(現代社会学部 3回生)
- ・これまで地域に関してあまり関心を持たなかったが、この講義を機会に、実際に地域活動に参加したりすることで、もっと、関心を持ち、自分にできることは何なのかを考えていきたいと思った。(現代社会学部 2回生)

○実際の地域活動に参加する学生



令和元年(平成31年)度 学まち推進型連携活動補助事業一覧 (連携プロジェクト)

事業名	申請者	連携先	イシュー別4領域のうち該当する領域
京都刑務所「矯正展」における 造形ワークショップ“ワクワク木育キャラバン”	矢野 真	京都刑務所	②安心安全・まちづくり支援
第3回KWU小学生プログラミングコンテスト	丸野 由希	8x9烏丸校 (京都イノベーション株式会社)	①子育てと高齢者支援 ④京都の産業支援
音楽活動による地域貢献・ 地域交流プロジェクト【京女の“音楽”宅配便】	土居 知子	京都市東山区社会福祉協議会 NPO法人「音の風」	①子育てと高齢者支援
京都の伝統染織産業における分野を越えた 産産学連携の商品開発	青木 美保子	綴織技術保存会奏絲綴苑 (株)マドレー 生活デザイン研究所	④京都の産業支援
福祉施設と作家のものづくり プロデュースと情報発信	宮原 佑貴子	社会福祉法人 白百合会	①子育てと高齢者支援 ②安心安全・まちづくり支援 ④京都の産業支援
まちライブラリーに関する調査研究: 「ひがしやま文庫」の実現に向けて	桂 まに子	京都市小松谷児童館	③京都・東山の歴史と文化
「呼吸法を用いた歌唱活動で健康法を学ぼう」	ガハブカ 奈美	京都市東山区社会福祉協議会 NPO法人「音の風」	①子育てと高齢者支援
「祇園新橋に生きる女性たち」 聞き書きプロジェクト	森久 聡	祇園新橋住民及び商店経営者	③京都・東山の歴史と文化
東山区の高齢者の地域福祉活動	岡崎 昌枝	京都市東山区粟田地域 包括支援センター 京都市東山区社会福祉協議会	①子育てと高齢者支援

京都刑務所「矯正展」における造形ワークショップ “ワクワク木育キャラバン”

●連携先：京都刑務所

発達教育学部児童学科 教授 矢野 真

開催場所：第42回京都矯正展(京都刑務所)

日時：令和元年10月26、27日の2日間

26日(土):10:00~16:00、

27日(日):10:00~15:00

内容：学生のデザインによる「木いほるだー」制作
(先着500名)

参加学生：矢野ゼミ3・4回生と2回生。

1. 実施の背景と目的

京都女子大学と京都刑務所の連携協定の一環として、「木育」を中心とした造形ワークショップを行っている発達教育学部 児童学科・造形(矢野)ゼミでは、京都刑務所内の作業所で作られる、子どもが使用する木工玩具のデザインを通して連携を行うこととなった。それに関連した事業として、平成28年、29年、30年度における京都矯正展に造形ワークショップを開催し、本年度は4回目となる。

平成30年度の「状差し&ペン立て」では、木地を数多く作ること、どのような年齢の方々にどのようなデザインが好まれるのか等に着目しながらデザイン案を考案した。今年度はさらに多くの木地を作ること、また前年度の着目点に加え、性別での好みの違いについて考慮しながら学生がデザインを行い、木地づくりを作業所と相談の上、依頼・制作した。

具体的に、本連携事業では木を利用した“木いほるだー”を10名の学生がデザインし、そのデザインをもとに刑務所(受刑者)に木地の制作を依頼した。その木地を使用して造形ワークショップを行い、地域住民に作品づくりを楽しんでもらうといった内容を検討・実施した。



写真1 学生がデザインした
“木いほるだー”

2. 実施内容

<実施1日目・26日>

実施1日目、無料ということも影響し、参加者は多く、開始から3時間後には2日目の木地から50個追加した300個の“木いほるだー”の木地もなくなってしまった。来場者の真剣に制作に取り組む様子が窺え、参加した学生は普段接する子どもだけでなく、大人との世代間コミュニケーションを楽しんでいた。



写真2 クランプで押さえ鋸で切る



写真3 やすりで磨く

<実施2日目・27日>

200個用意していた木地は開始から2時間ですべてなくなってしまった。平成29年度に行った時のように、管用材料などの代材を用意しておくべきであったことは、次年度の反省として挙げられる。しかし、参加者は普段手にすることのない鋸や鑿を使い、楽しんで制作を行う来場者の様子が窺われ、盛況であったように思われる。



写真4 手で押さえ鋸で切る



写真5 紙やすりで磨く

3. 実施による成果

「矯正展」における学生たちの学びの姿について検討するため、ワークショップ終了後に学生から提出された報告書を分析した。

ワークショップは「学生が木いほるだーのデザインを考える」→「京都刑務所の木工部がそれを加工し木地を作る」→「それを使って参加者(市民)が作品を完成する」という流れで実施されている。そこで、実践の目的に対応し、記述の特徴を以下の視点でカテゴリー化し、さらにそれぞれに下位カテゴリーを生成した。

1. 矯正展(ワークショップ)における学び
2. 作品制作(デザイン)
3. 刑務所や受刑者(ワークショップの背景)の印象や理解

以下では、この分類に沿って学生の代表的な記述例を示しながら考察を行う。

① 矯正展(ワークショップ)における学び

矯正展における学びは、「参加者の理解」と「参加者への支援」「運営を通じた学生同士の学び」に大別できた。

まず、「参加者の理解」について、参加者の道具の使用スキルについての気づきが述べられている。さらに、多様な年齢層があり、コミュニケーションをとることができていることや、多様なニーズがあることを実感していたことが窺われる。

「参加者への支援」については、参加者とのかかわりを通して制作における支援についての様々な気づきや学びが述べられている。これに対して、2年目の学生においては、運営や支援における反省や具体的な改善についての記述がみられた。

「運営を通じた学生同士の学び」について、事前に役割を分担し、協力することにより活動がうまくいくことを実感している様子が窺われた。

② 作品制作(デザイン)

作品制作に関する事柄については、「デザインについての学び」と「対象に応じたデザイン」に大別できた。

まず、「デザインについての学び」については、シンプルで分かりやすいものや自由度が高いものが好まれることが述べられている。

「対象に応じたデザイン」については、デザインの好みには年代や性別による個人差があることや、個人差を踏まえたデザインの重要性への気づきが窺われる。2年目の学生においては、昨年の反省がデザインの選定に活かされていた。また、デザインの保育実践への応用について言及したものもあった。

③ 刑務所や受刑者(ワークショップの背景)の印象や理解

刑務所や受刑者の印象や理解については、「地域との連携」「新たな理解や発見」「刑務所や受刑者に対するイメージの変化」に大別できた。

「地域との連携」については、刑務所、地域、大学が連携してワークショップが成立していることを理解するとともに、連携の意義についての認識が深まったことが窺われた。さらに、ワークショップが受刑者の社会復帰や学生の学びなど、それぞれに対しても効果があることが認識されていた。

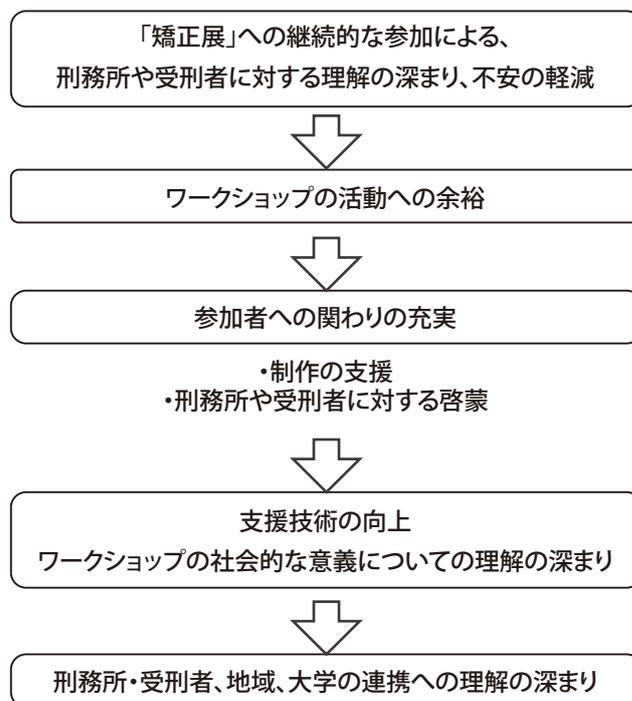
「新たな理解や発見」については、ワークショップを通して刑務所の特性や受刑者のもつ技術に対して理解が深まっていることが窺われた。また、連携を通じて受刑者のことを理

解する必要性を感じたという意見もみられた。

「刑務所や受刑者に対するイメージの変化」について、本年度は1年目の学生においてもネガティブなイメージを持っているとする記述は少なかった。矯正展への参加の中で刑務所や受刑者についての説明や施設見学を通して、刑務所に対してよりポジティブなイメージや身近な印象を抱いていることが窺われる。

4. まとめ

昨年度同様、2年目の学生の記述の特徴や、1年目の学生のそれとの比較から、「矯正展」への継続的な参加による学生の成長について、以下のようなことが明らかとなった。



このように、京都刑務所との連携を通じて、地域への貢献とともに、学生は「木育」による教材の作成や保育への応用、さらには小学校での技術的な指導のあり方を考えること、そして様々なコミュニケーションなど多くのことを学び、自己の技能や意識を向上させる結果となった。

今後もこの連携を継続的に活動することを通して、刑務所・地域への理解、連携を通じた学生の意識向上について、更なる検討が必要であろう。

第3回KWU小学生プログラミングコンテスト

●連携先：8x9烏丸校(京都イノベーション株式会社)

現代社会学部現代社会学科 講師 丸野 由希

1. 実施の背景と目的

2020年度からの新学習指導要領の実施を見据えて、本学では2017年度より「KWU小学生プログラミング教室」および「KWU小学生プログラミングコンテスト」を実施している。コンピュータを意図したとおりに動かすために、適切な記号の組み合わせ方を考える(=プログラミング)体験をしながら、プログラミングへの興味関心を深め、現代の生活に欠かせないコンピュータに関心をもってもらうことをねらいとしている。本事業では、プログラミングを学んでいる大学生が主体となって企画・運営を行うことで、次世代を担う小学生と大学生へのプログラミング教育を目的としている。

2. 活動内容

2-1 第3回KWU小学生プログラミング教室

日にち：2019年7月6・7・16・17・20日

場所：京都女子大学および8x9烏丸校

参加者(小学生)：188名

参加者(大学生)：50名(のべ119名)

実施内容

1. プログラミングについての説明
2. パソコンやマウスの用語および操作説明
3. 迷路
4. ビルディング(3D課題作品の制作)

京都市内の小学校に通う小学生を対象に、同一内容で複数日・複数回に分けて実施した。キャンセル待ちが出るほどの参加申し込みがあり、約200人の小学生とその保護者が参加し、好評を得た。

本プログラミング教室では、マインクラフトをベースに開発されたプログラミング学習教材8x9Craft(ハッククラフト)を用いた。本教材はプログラミングによって3Dブロックを前後・上下に配置して、課題作品を作り上げていくことが可能である。8x9Craftには、JavaScriptを使用してプログラミングをするコードエディタと命令の書かれたブロックを組み立ててプログラミングをするブロックエディタがある。今回の教室では、ドラッグ&ドロップなどの操作で直感的なプログラミングが可能なブロックエディタを使用した。図1は、3つのブロックで構成された「にんじん」で、他にも3Dの「かめ」「アルファベットのT」など大学生が考案した計12作品を課題(図2)として提示して、参加者のペースでプログラミングによる課題作品制作を行えるように大学生がサポートした。

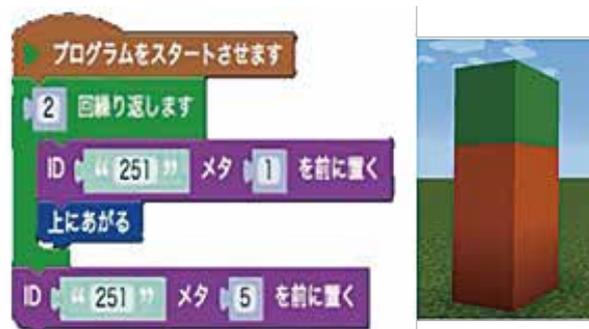


図1 ブロックエディタによるプログラミングと実行結果



本プログラミング教室のメイン講師はプロジェクトリーダーの学生が務め、それに加えて、大学生チューターを児童2~3人に1人の割合で配置して個別のサポートを行った。その際、「子どもたちがやりたいことを尊重する」、「子どもが困っている時は、やりたいことを聞いた上で必要なサポートをする」などのスタッフ心得を念頭に小学生の質問対応にあたった。本教室では、単にプログラミング体験だけではなく、身近なコンピュータやコンピュータの得意なことについても小学生が考えたり、大学生が伝えたりすることもプログラミング教室のカリキュラムに組み込んだ。

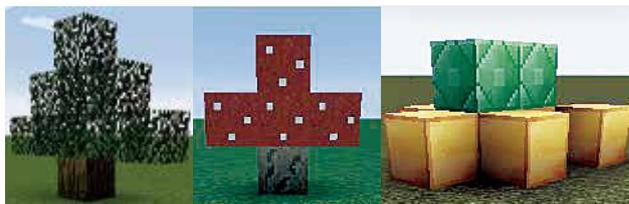


図2 大学の授業でプログラミングを学んでいる本学の学生が考案した課題作品の一例(松、きのこ、かめ)

2-2 KWU小学生プログラミングコンテスト

日時：2019年10月5日(土) 13:00～16:30

場所：京都女子大学F校舎模擬法廷

参加者：12名(低学年:6名、高学年:6名)

本コンテストは、プログラミングを学んでいる小学生たちがその成果を競い合い、互いのモチベーションを高めあうことを目的としている。コンテストは低学年の部と高学年の部に分けてトーナメント形式で行い、コンテスト当日に発表された課題作品(図3、4)をいかに効率よくプログラミングできるかを評価した。コンテスト予選を通過した京都市内の小学校に通う小学1～6年生12名が参加した。

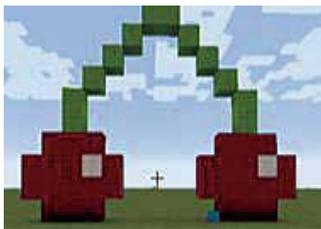


図3 決勝課題(高学年): さくらんぼ

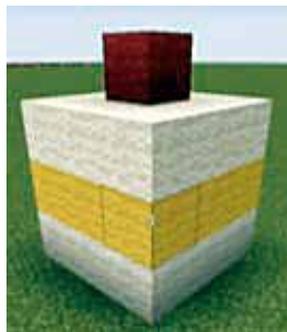


図4 決勝課題(低学年): ショートケーキ

3. 実施による成果

プログラミングによる課題作品の作成を行うことで、作品が完成するたびに子どもたちの達成感が目に見えて感じられた。子どもたちが喜んでいいる様子は、サポートする大学生にとっても達成感や自信につながった。また、少しずつ作品の難易度が上がっていくように教材を工夫したことで、子どもたちが難易度の高い作品にも臆することなくどんどん挑戦していく姿勢が見られた。子どもたちにとって、プログラミングが「何かわからないけど難しそう」ではなく、挑戦してみたいもの・やればできるものに変化したことを実感した。プログラミング教室の最後の方で設けた、子どもたちの成果を保護者や小学校の教員に共有する時間では、子どもたちが学んだことを積極的に話す様子や嬉しそうに作成したプログラムや作品を披露している様子を見て、保護者や教員がこれまで持っていたプログラミングに対する印象も「子どもたちが楽しんで取り組めるもの」に変化したと感じた。

意識変化以外では、プログラミング教室開始時はぎこちなかったマウス操作(特に、ドラック&ドロップ)を、90分のカリキュラム終了時には全員が習得できた。子どもたちはプ

ログラミングによる作品作成に夢中になり、知らず知らずのうちにマウス操作を習得していった。また、3Dブロックを前後・上下に配置して課題作品を作り上げていくことを通して、小学生および大学生双方の空間把握のトレーニングにもなった。

本実践を企画・運営した大学生たちの変化としては、小学生からのプログラミングに関する質問や疑問点への対応を通して、自身のプログラミングの理解を深めることにつながったことが自由記述アンケートからわかった。本実践において、次世代を担う小学生と大学生がそれぞれのプログラミングへの興味関心を深めるという目的を十分に果たせたのではないかと考えている。

今後も継続してKWUプログラミング教室およびプログラミングコンテストを行っていきたい。

>>>> 参加者の声(アンケートより抜粋)

- ・マウスそうさとかいろいろむずかしいからもっとまねてみたいです。
- ・今回プログラミングをして、そうさは全てむずかしいというわけじゃなかったから、おもしろかったし、楽しかったです。そして、パソコンにもこんなきょう(しくみ)があるとは知らなかったの、初めて知ったこともあって、おもしろいなあとも感じました。
- ・これから大人になるにつれて、プログラミングをする機会が増えると思うので、今回、学べてよかったです。
- ・これまでは立体ではなく、平面でつくるものしかやったことがなかったが、今回は立体のものができたので面白かった。1位になれずにくやしかったのももっとがんばりたい。

>>>> 保護者の声(アンケートより抜粋)

- ・教室での子供の自発的に学びたい姿勢に驚きました。教室、コンテストを通して学生の皆さんが子供にやさしく接して下さってありがたかったです。また、次回もぜひ参加したいです。
- ・気軽に参加しましたが、立派なイベントで驚きました。学生さんをはじめとして皆様のご尽力に感謝いたします。良い結果だったので、本人の自信にもつながり、プログラミングへの意欲が増したら嬉しいです。
- ・近所なので、気軽に参加させていただきました。好きな事が得意な事として認められて自信が付き、これからはますます独学に励みそうです。

音楽活動による地域貢献・地域交流プロジェクト 【京女の“音楽”宅配便】

●連携先：京都市東山区社会福祉協議会・NPO法人「音の風」

発達教育学部教育学科・音楽教育学専攻 教授 土居 知子

- ◆活動地域・場所：京都市東山区
- ◆活動時期：2019年7月～12月（全4回）
- ◆活動内容：様々な形態による演奏を地域の施設に出向いて届け、相互交流を図る
- ◆参加学生：音楽教育学専攻4回生有志 延べ37名

実施の背景と目的

本事業は、昨年度の《音楽による地域貢献プロジェクト〈京女音楽ふれあい隊・京女の“音楽”宅配便〉》の継続事業として実施された。東山地域の福祉施設において学生が日頃の学習成果を披露し、音楽を媒介としたコミュニケーションを図りながら、地域住民と交流を深めることを目的としている。いまや、大学は教育・研究機関としての役割にとどまらず、昨今は社会貢献・地域貢献が求められるようになり、人的交流や産業活性化において、周辺地域からの要望や期待が大きくなってきているといった背景がある。地域との連携活動の機会、学生にとって“体験型・実践型学習”を行う成果披露の場となり、教育効果が一層高まることが期待できるため、本プロジェクトは大学での学びや経験を通して大学と地域が支え合う共生社会を目指す継続的な取り組みの一環として位置付けていきたいと考える。「プレゼンテーション能力」「音楽を媒介としたコミュニケーション能力やセルフマネジメント能力」「総合的な自己プロデュース能力」を身に付け、地道な活動を根付かせていくことが期待される。

実施概要

NPO法人「音の風」が京都市東山区社会福祉協議会と提携し活動の場としている東山学区内の様々な「健康すこやか学級」「健康すこやかサロン」に出向き、演奏や音楽レクリエーションを通して交流を図った。活動にあたっては、「音の風」主宰の西野桂子氏（音楽教育学専攻卒業生）、京都市東山区社会福祉協議会事務局長の草薙千尋氏にコーディネーターとして関わって頂き、今年度は次に挙げる4か所で開催した。

①地域密着型ケアセンター いまくまの（7月10日）

グループホーム・地域サロンとして多くの方が集う上記施設に赴き、訪問演奏を行った。4回生7名の学生が活動に参加し、合唱・重唱・独唱・ピアノ連弾等のプログラムを用意した。参加された方々も一緒に懐かしい歌を口ずさんだりされ、非常にアットホームな活動となった。大学から徒歩圏内に位置するため、今後も継続的に活動していきたいと考えている。



写真1：懐かしい歌や季節の歌を合唱する様子

②有済学区健康すこやかサロン（7月13日）

元有済小学校内で毎月第二土曜日に開催されている健康すこやかサロンにゲストとして招かれ訪問演奏を行った。



写真2：利用者の方々に歌詞カードを配り一緒に歌う様子

昨年に引き続いて2回目の活動となるが、今回は4回生12名の学生が活動に参加し、合唱や重唱、独奏独唱、そしてピアノ連弾等、ヴァリエティーに富んだプログラムを届けることができた。歌詞カードを配ることによって全員で声を合わせて歌うなど、音楽を介した温かいコミュニケーションの場となった。この訪問演奏に関しては、継続的に行ってほしいという強い要望を既に頂いている。

③今熊野学区健康すこやかサロン（11月14日）

元今熊野小学校で毎月第二木曜日に開催されている健康すこやかサロンへ赴き、訪問演奏を行った。4回生ピアノゼミ生による5名のメンバーで、ピアノ連弾を中心としたプログラムを用意したが、特に《ラデツキー行進曲》は、全員の手拍子も加わるほど盛り上がり、アンコールまで頂戴した。やはり、参加型の音楽は人々の心を動かしエネルギーを届けることができると再認識できた貴重な機会となった。この場所には、アプライトピアノが設置されており、音楽活動を行いやすい環境であるため、今後も継続的に訪問演奏がで

きればと考えている。



写真3:演奏の前に楽曲紹介や曲目解説をする様子

④ 修道学区健康すこやかサロン(12月18日)

東山総合支援学校で毎月第三水曜日に開催されている健康すこやかサロンへ赴き、訪問演奏を行った。ここでの活動は昨年に引き続き2回目となる。4回生の実技授業「ピアノ8」の受講生13名で活動を行い、クリスマスナンバーを中心に、ピアノ連弾や合唱、アコーディオンやヴァイオリンも加わったヴァラエティーに富んだ器楽アンサンブル等のプログラムを届けた。司会進行や演出も工夫され、非常にアットホームな雰囲気の中、配布された歌詞カードを見ながらともに合唱するなど、様々な年齢層の方々に喜んで頂き、充実した音楽の時間を届けることができた。



写真4:コスチュームや演出も工夫したコンサートの様子

実施による成果

以上のように、計4か所の東山区の福祉施設、「健康すこやかサロン」において、【京女の“音楽”宅配便】と題したピアノアンサンブルや声楽アンサンブル、様々な楽器によるアンサンブルの形態で演奏を届ける活動を行った。参加した学生は、互いに人の声や楽器の音色に耳を傾けることにより「聴く力」を養い、一つの企画や音楽プログラムを創り上げる協調

性や豊かな表現力を育むことが出来た。また、双方向での充実した音楽コミュニケーションの場を提供するために、何度も相談し様々な工夫を重ねることにより、プログラミングも含めたプレゼンテーション能力、自己プロデュース能力、マネジメント能力等も身に付けることが出来た。専攻での学びの成果を発表し活用する機会を得て、学内の授業だけでは習得できない貴重な経験、今後の音楽活動や教育活動のヒントになったことは間違いない。これらの活動を通じて、あらためて、音楽のもたらす力、音楽を介したコミュニケーションの重要性を双方向で再認識できたことが、最も大きな成果であったと考えられる。

今後の課題とまとめ

東山区社会福祉協議会が実施している「健康すこやか学級」「健康すこやかサロン」は、学区ごとに年間予定(開催曜日・時間)が決められている。これらに即して当該活動を実施するには、参加する学生の授業スケジュール、指導や引率に携わる教員の空き時間等をうまく調整することが必要不可欠となる。したがって、活動回数、活動に関わる人数が多くなるほど、その日程調整は困難を極める。現在は、授業やゼミといった単位で準備を行い、学びの成果を発表する形をとっているが、今後は正課内だけではなく、正課外のプロジェクトおよびプログラムとして、学年を越え授業科目を越えての継続的な活動の形も含めて、より良い内容と方法を模索していくべきであろう。音楽を介して地域と大学を結ぶ活動は、音楽教育学専攻だからこそ行えるものであるが、まだまだ未知の可能性が眠っていると考えられる。まずは地道に継続していくことを第一の目標に置き、地域に根差す大学としての交流・連携を一層深め、地域への貢献に寄与していきたいと願っている。

京都の伝統染織産業における分野を越えた産産学連携の商品開発

●連携先：綴織技術保存会奏絲綴苑（株）マドレー 生活デザイン研究所

家政学部 生活造形学科 教授 青木 美保子

1. 本プロジェクトの背景にある問題と趣旨

本事業の背景には、2017年度に取り組んだ学まち推進型連携活動補助事業「現代のライフスタイルに合った綴織の商品開発」と正課外活動推進補助事業「京都の伝統染色産業と学生のデザインコラボレーション」、2018年度に取り組んだ学まち推進型連携活動補助事業「京都の伝統染織産業と人の輪をつなぐネットワークづくり」がある。

2017年度、申請者は、ライフスタイルの変化にともない和装産業が低迷傾向にあるなかで存続が危ぶまれる伝統染織の技術が多くなっているという現状を踏まえ、学生達にその存続の一助となる活動を起すことを呼びかけ、前述の二つの事業に取り組んだ。これらの事業では、伝統染織を素材として、学生達が、自らの感性を生かし、アクセサリやバックなど若い世代の女性達の好みや機能を考慮したデザインの商品提案を行ない、一定の成果を得ることができた。しかし、一方で学生達は「これだけでは『伝統染織』の価値を伝えることができない」という学びを得た。

そこで、この学びを持って、2018年度は染織産業に関わる方が一般の方に伝統の染織技術を伝授するワークショップを企画した。このワークショップは、学生が中心となり、伝統染織産業の様々な職人の方と手を取り合い、伝統産業を楽しみながら知ることができる仕掛けづくりを計画・実行するという企画であった。

この2年間の活動で得たネットワークを活かし、2019年度は、生活造形学科学生有志とともに、2017・2018年度でお世話になった職人の方々の間に立って、その技術の掛け合わせによる新たな技術を考案し、その新技術で制作した生地で商品開発を行なう事業を計画した。

2. 協力企業と学生メンバー

協力企業：綴織技術保存会 奏絲綴苑／株式会社マドレー
 工房見学企画：京都女子大学 生活デザイン研究所
 非常勤研究員 宮原佑貴子氏
 技術開発：生活造形学科 2 回生、小林飛鳥、山本彩花

3. 活動内容

3-1 工房見学

新たな染織技術の開発を目指して、まずは、伝統の技術を学ぶべく、各工房を訪問した。奏絲綴苑の平野喜久夫氏と株式会社マドレー の日比野淳平氏に、実演を交えて、詳しい技術解説をしていただいた(図1,2)。この見学を踏まえ、新技術の考案および商品開発に挑戦したい学生を募ったところ、生活造形学科 2 回生、小林飛鳥、山本彩花、この 2 名が

挑戦することとなった。



図1 奏絲綴苑(5月28日)



図2 株式会社マドレー(6月4日)

3-2 藤花祭でのマーケティングおよび広報活動

このプロジェクトの拠点となる「伝統をつなぐ会」では、過年度と同様に、綴れ織、型染、マドレー染のアクセサリを制作し、藤花祭で販売した(図3)。それに合わせ、本プロジェクトの紹介(図4)と、マーケティングリサーチを目的として、綴れ織やマドレー染の認知度、商品の価格帯等のアンケートを行った(11月2,3,4日)。



図3 「伝統をつなぐ会」綴れ織・型染・マドレー染のアクセサリ販売の様子。(本学 S 校舎前にて)



図4 《マドレー染×綴れ織》アートボード
(本プロジェクトの紹介)

3-3 試作1・2:マドレー染系織(9・10月)

マドレー模様を染めた布を、解きながら緯糸を取り出し、手織りでマドレー模様の再現を試みた。しかし、予測したほどの模様の再現には至らなかった(試作1)。一方、マドレー染した糸の方は、様々な色が混じった美しい糸ができ、それで手織りをすると美しい色の織にはなったが、マドレー染模様の再現にはならなかった(試作2)(図5)。そこで、小林・山本は、マドレー染した糸の織に、綴れ織用の糸での織を混ぜて挿し色を入れ柄デザインでの工夫を行ない、その生地ですべルトアクセサリを制作した(図6)。

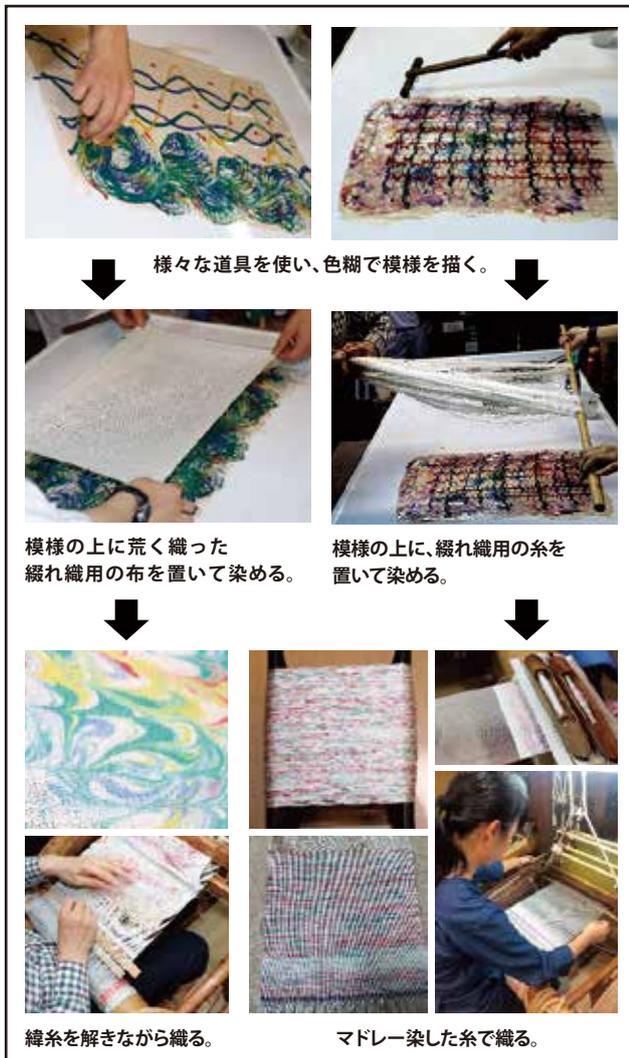


図5 試作1・2 マドレー染糸織の工程

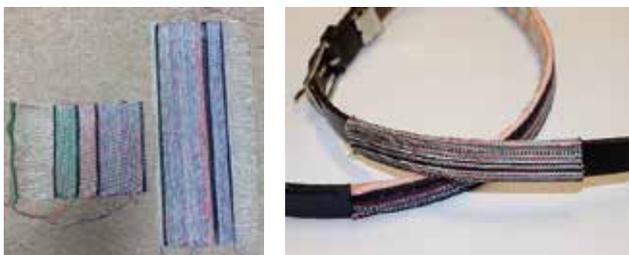


図6 マドレー染した糸で織った生地と、その生地で作したベルトアクセサリ

3-4 試作3・4: マドレー染 経絣織・緯絣織 (12・1月)

①染工程

試作3用には、経糸が絡まない程度に緯糸を入れ、経糸がしっかり染められるように工夫し、試作4用には、織り上がりを想定し、試作1より緯糸を多くした密度の高い布を準備し、マドレー染を行った(図7)。

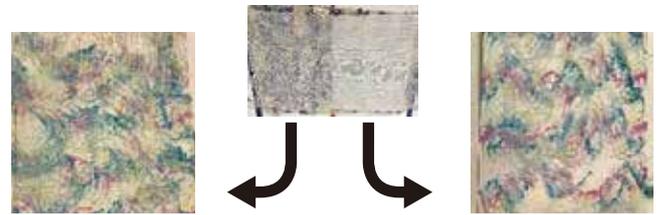


図7 試作3用(左)試作4用(右)マドレー染生地

②織工程

試作3は、マドレー染生地(図7左)を機にかけ、荒く入った緯糸を取り、代わりにラメ入りの緯糸で織る(マドレー染経絣織)。試作4は、マドレー染生地(図7右)を機にかけ、緯糸を解き杼に巻き取りマドレー染緯糸を準備し、その巻き取った緯糸で再び織る。

③試作3・4の完成した試作生地



図8 試作3マドレー染経絣織(左)試作4マドレー染緯絣織(右)

4. まとめ

試作を繰り返すことで、結果、「マドレー染糸織」・「マドレー染経絣織」・「マドレー染緯絣織」、この3種の染織技術を開発することができた。この新たな技術の特徴を以下に記すことで、まとめとする。なお、本プロジェクトの目標であった「新たな技術による商品開発」という点では、「マドレー染糸織」については、商品試作は行ったものの、「マドレー染経絣織」と「マドレー染緯絣織」については、染織生地見本の制作までにとどまった。この技術を用いた実際の商品開発は、今後の課題としたい。

特徴1:マドレー染は表に模様が染まり裏は無地となるが、この新技术を用いると、表裏共に模様が出る染織となる。

特徴2:緩れ織はたくさんの色糸を組み合わせることで模様を表現する技法であるが、この技術は糸の組み合わせは不要となる。ただし、代わりに、一度織ったものを解き、再び織るといった複雑な作業が必要となる。このように、手間暇の面では、足し引きゼロの感はあるものの、これまでの緩れ織には無い新鮮な模様表現ができる。

福祉施設と作家のものづくりプロデュースと情報発信

●連携先：社会福祉法人 白百合会

生活デザイン研究所 非常勤研究員 宮原 佑貴子

1. 事業の背景と目的

障がいによって一般就労が困難な方が通所する福祉施設では、業務の一環としてさまざまな生産作業がおこなわれている。施設が持つ技術を活用したオリジナル商品を製造しているところも多く、品質の高い商品が生み出されている。しかし商品の販路は、バザーなど福祉支援の市場に限られることもあり、一般市場の中で目にする機会が少ないことや、一般市場に比べて商品の価格が安価に設定されることが多いため、ひとつひとつの商品価値を価格に反映させることが困難な現状がある。こうした課題解消の一助となるべく、平成27年5月に本学生活デザイン研究所に所属する有志学生らとともに「まごころプロジェクト」を立ち上げ、福祉施設で作られた商品の魅力をひとりでも多くの人に伝えることを目的とした活動をおこなっている。

この取り組みを連携している社会福祉法人白百合会リ・プラン京都中京は、京都市中京区の三条通に面してカフェ店舗と作業室を併設する就労継続支援B型事業所で、カフェ店舗では接客や製菓、作業室では手刺繍や手織りの高い手作業技術による商品製造をおこなっている。商品製造では、染織やデザインの専門知識をもった職員が作業をサポートしながら、市場に合わせた新しい商品の開発にも日々取り組んでいる。

そして近年、市場ではハンドメイド商品に注目が集まっており、販売会やインターネットサイトで作品を販売する作家が人気となっている。また京都は、弘法市や手づくり市など、毎月定期開催される市が盛んな他、美大や芸大も多く、芸術に開けた地域でもあることから、多くの作家が作品披露の場を設けて活動している。こうした背景の重なりから、本事業では、京都で学ぶ学生たちが、京都を拠点に活動する作家と福祉施設との間に立ち、作家からハンドメイド技術などを学び、その学びを施設に伝えながら、新たな商品開発に役立てることで、両者の持つ強みを合わせた付加価値の高い商品づくりと販路開拓を目指すことを目的としている。

2. 活動の形態

生活デザイン研究所「まごころプロジェクト」に所属する学生3名が中心となって活動をおこなった。リーダーが中心となって施設や作家との連絡をおこない、学生主導によって話し合いを重ね、計画を進めた。また、3名は皆違う学部であったため、異なる専門領域の学びを活かし、場面によってさまざまな役割を持ちながら1年間の活動をおこなった。さらに大学研修員が時折活動に加わり、経験を生かした知識を寄与してくれた。

学生メンバー：池田美菜萌(現代社会学科3回生)
鈴木歩(史学科3回生)
早船愛有加(生活造形学科1回生)
岩崎里映(大学研修員)

3. 活動の内容

3-1 作家との出会い

ハンドメイド商品のリサーチに向かい「京都アートフェスタart Dive 2019」の会場において、京都を拠点にペーパークイリング作家として活躍する鍋川由喜子氏と出会った。細長い紙をくるくる巻いて繊細なモチーフを形づくるペーパークイリングの技法について話をうかがい、その技術に大変魅力を感じ、後日、学生から鍋川氏に取り組みへの協力を依頼し、快諾をいただいた。

3-2 実施内容の決定

学内でのミーティングを開催して実施内容について検討し、以下の2つのステップによって進めることを決定した。(図1)

◆ステップ1

「作家から学ぶ」

京都女子大学でのペーパークイリング講習会の実施

◆ステップ2

「学びを伝える」

リ・プラン京都中京での体験会の実施



図1 活動図

3-3 ペーパークイリング講習会の実施



日程：12月21日(土)11時～14時

場所：京都女子大学図書館 soraカフェ前スペース

参加者：10名

ステップ1では、学生がペーパークイリングの技法を学ぶため、鍋川氏を本学に招いて講習会を実施した。本事業メンバーの学生と、生活デザイン研究所でハンドメイド商品に携わる学生らが、ペーパークイリングの基本工程を教わり、モチーフを仕上げた。さらに展示や販売会の実績が多い鍋川氏のこれまでの経験をお話いただき、学生たちはハンドメイド商品を披露する際のディスプレイの工夫やセールの姿勢などについてさまざまなアドバイスをいただいた。

3-4 ペーパークイリング体験会の実施



日程：1月25日（土）9時半～13時

場所：社会福祉法人白百合会 リ・ブラン京都中京

参加者：13名（うち学生3名）

ステップ2では、鍋川氏から材料等の監修を受け、講習会で学んだペーパークイリングの技法を学生らがリ・ブラン京都中京に伝える「ペーパークイリング体験会」を実施した。リ・ブラン京都中京ではこの日を研修会として9名の利用者の方が参加され、グループごとに2種類のモチーフを練習し様々な模様を製作した。

4. 活動の成果

4-1 講習会、体験会を実施して

今回の取り組みに選んだペーパークイリングの技法は、細長い紙と専用の棒があればどの場所でもできることと、紙を棒にくるくる巻くという単純作業が基本となっていることから、皆が気軽に取り掛かることができることや、様々な紙の色を組み合わせることでオリジナル性のある華やかな作品を楽しめることが大きな魅力であった。体験会に参加した施設の利用者の方々は、全員がペーパークイリングの基本工程をおこなうことができ、施設からは「今後の商品への活用に向けて、製作の取り組みを継続したい」との反応をいただいた。また、利用者の方からも、「楽しかった」、「またやりたい」などの感想を聞くことができた。



4-2 事業全体を振り返って

本事業では、学生らが作家に学び、それを伝えることによって、ものづくりの架け橋となる役割をおこなった。作家との出会いから施設での体験会に至るまで、どの場面にも、ものづくりを通じたコミュニケーションが溢れていた。このようなものづくりを通じたコミュニケーションから生まれるアイデアや気づきが、日頃違う生活をする両者の思考の距離を近づけ、新しい発想を生み出す可能性を強く感じた。また、こういった作家や福祉施設の結びつきを、商品化や販路開拓につなげていくことは今後の課題である。

これからも、福祉施設と学生による商品開発を継続し、さまざまな人との協働によるものづくりに取り組んでいきたい。

まちライブラリーに関する調査研究： 「ひがしやま文庫」の実現に向けて

●連携先：京都市小松谷児童館

図書館司書課程 講師 桂 まに子

1. プロジェクトの目的

東山区には区役所の敷地内に東山図書館があり、近くには小中学校もあるため、立地的には図書館と子どもたちの距離は近いように見える。しかし、学校では放課後の寄り道は禁止されており、近くにある図書館でも立ち寄ることができない。小学校の統合により遠方通学者が多いことから、一度帰宅してまた学校の近くまで来ようという子どもも少ない。本プロジェクトでは、東山区には子どもたちが地域の図書館で本と接する機会が少ないという現状をふまえ、図書館とは異なる形態でまちなかで本を手にとることができ、本を介して地域交流のできる場づくりを目指す。今年度は「まちライブラリー」の手法を参考に、候補地選定のためのフィールドワークおよび実証実験を行った。

2. プロジェクト概要

2.1 まちライブラリーに関する調査

まちライブラリーとは「本を媒介としたコミュニケーション活動」を指す。東京・六本木ヒルズライブラリーを手掛けた磯井純充氏が提唱し、2011年に大阪・天満橋のビルの一室で「ISまちライブラリー」を始めた。2019年12月現在、まちライブラリーは759ヶ所あり、関西圏を中心に全国に広がっている。まちなかのカフェやお店、オフィス、病院、お寺の一角に本棚を設けている場合が多く、本を通じて人と人が繋がる場づくりをしている。取り組み方は様々であるが、ライブラリーを訪れる人が本を持ち寄ってメッセージをつけて寄贈したり、本を交換し合ったり、イベントを開いて本をテーマに交流したりする活動が多く見られる。

まちライブラリーに類似する小さな図書館を総称して「マイクロ・ライブラリー」とも言う。活動別に分類すると、(1)図書館機能優先型、(2)テーマ目的志向型、(3)場の活用品型、(4)公共図書館連携型、(5)コミュニティ形成型の5つに類型化される。京都市内にある8つのまちライブラリーのうち、6つはテーマ目的志向型(友禅染め、手作り、アート、アウトドア、ビール、昆布)で、残る2つは場の活用品型(青少年活動センター、学習塾)であった。本プロジェクトは児童館と連携したため、後者(場の活用品型)に該当する。

2.2 地域課題の探索

司書課程受講生6名を中心にディスカッションを重ねた結果、東山区の図書館で子どもの利用が少ない要因の1つは、地域に市立図書館はあるが、学校の規則で小学生は放課後に立ち寄ることができないからではないかという考えに至った。学校帰りの小学生たちは児童館を放課後の居場

所に行っていることも分かったため、子どもたちが集まる場所で本を介した交流の機会を創出することを目指す。今年度は、児童館という場を活用したまちライブラリー「ひがしやま文庫」を仮設し、本を用いたワークショップの企画・開催に取り組んだ。

2.3 児童館が抱える課題

具体的な連携先には、大学から程近い京都市東山区小松谷児童館(正林寺)を選んだ。同児童館は毎月第2土曜日に「子ども喫茶」を開いて地域の人と交流する場づくりにも積極的である。館内には図書室が併設されているのだが、蔵書構成や使用頻度を調査したところ、次の2つの課題が明らかになった。

課題1(選書問題)：図書購入の予算は確保しているが、子どもの本に関する専門的知識を持ち合わせていないため、児童館職員の目線でその都度選書するしかやりようがなく、蔵書に偏りがある。

課題2(図書室運営問題)：子どもと本を繋ぐ活動を児童館で展開したいという思いは抱いているが、児童厚生員にはそのためのノウハウがなく、協力者もいないままこれまで取り組めないでいた。

2.4 司書課程の学びを生かした問題解決

課題1の選書問題を解決するために、学生たちは児童館に通って図書室の現状を把握し、放課後の子どもたちに直に接して小学生の読書傾向を調査した。第2土曜日に学童クラブの子どもたちが主催する子ども喫茶にも参加し、小学生と交流して得た情報も参考になった。児童館図書室の蔵書を充実させる目的のもと、集めたデータと司書課程の児童サービス論で学んだスキルを活かし、小松谷児童館の小学



小松谷児童館の子どもたち向けに選書した20冊

生向けにカスタマイズして選書方針を立てた。6ジャンル(絵本、読み物、教養、工作、料理、漫画)から20冊を選び、購入・寄贈した。

もう1つの課題である図書室運営については、小松谷児童館の児童厚生員と話し合いを重ね、連携活動の枠組みを設計した。具体的には、選書問題解決のために選書した20冊を用いて夏休みにワークショップを開催した。前半ワークショップ(8/5)では、受講生が児童サービス論で習得したスキルでブックトークや読み聞かせを実践した。子どもたちは紹介してもらった20冊のための本棚づくり(デコレーション)をし、毎日目にする場所(児童館の玄関)に本棚を設置した。後半ワークショップ(8/19、8/20)では、2日間かけて気に入った本の読書絵はがき(大判画用紙)を制作し、最終日に作品を披露し合った。合計3回のワークショップに参加した小学生は約30名であった。

前半ワークショップの様子(8/5)



司書課程受講生によるブックトーク、読み聞かせ
本棚づくり(児童館入口に設置)

後半ワークショップの様子(8/19)



読んだ本の絵を広げて絵を描く
子どもたち総勢30名で制作中の風景

後半ワークショップの様子(8/20)



読んだ本と完成した絵と一緒に紹介
同じ絵本を選んだ子どもたちの絵を紹介中

・実際の作品



『きみはほんとうにステキだね』

『ざんねんないきもの事典』

3. プロジェクトの成果と今後の展望

司書課程受講生による選書および夏休みのワークショップは、連携した小松谷児童館に変化をもたらした。2つの課題がどのように解決されたのか、児童館からの回答をもとに整理する。

課題1(選書問題):大学生による読み聞かせは子どもたちにとっても、児童厚生員の方々にとっても新鮮な刺激であったという。司書課程の学びを活かした選書にも理解を示し、次年度以降の児童館図書室選書のアドバイスをしてほしいとの依頼を受けた。図書館の専門知識が児童館との連携に役立つことが分かったことから、地域の図書館が児童館図書室の蔵書構築をサポートするという新しいサービスのアイデアが生まれた。

課題2(図書室運営問題):児童厚生員だけではなかなか踏み出せなかった子どもと本の活動がようやくできた。子どもたちは制作活動が好きなので、今後は創作絵本づくりなどをやってみたい。児童館側から次年度の活動に向けて新しい提案がなされたため、継続的な活動を視野に入れた「本を介したコミュニケーション活動」(まちライブラリー)に取り組めそうである。

図書館司書は一般的に図書館の中だけのスキルとして見られがちな資格であるが、地域というフィールドで活躍する道を開拓していくことにより資格の有意義性が深まる。本プロジェクトを契機に地域連携型司書養成に力を入れ、司書の学びを活かした地域連携活動の実践事例を増やしていきたい。

「呼吸法を用いた歌唱活動で健康法を学ぼう」

●連携先：京都市東山区社会福祉協議会 NPO法人「音の風」

発達教育学部教育学科・音楽教育学専攻 教授 ガハプカ 奈美

活動地域・場所：京都市内

活動時期：2019年9月～12月（全6回）

活動内容：歌唱しながら呼吸法を学ぶ

参加学生：ガハプカゼミ4回生7名

実施の背景と目的

本事業は以前より地域連携事業の一環として、中・高齢者に対して行われている各学区内の「すこやか学級」での呼吸法を中心とした歌唱活動の提供を行ってきた。それに関連した活動として、本年は、歌唱活動の部分に更に力を入れた実施をすることとした、呼吸法と音楽（歌唱）による地域貢献を行うものである。

申請学生たちはいずれも申請代表者の下で、教育者として必要な西洋クラシック音楽の声楽を中心にその楽曲を理論的に探究し、感性豊かに表現することを目指して日々研鑽を積んでいる。そのような大学での学びを地域社会の様々な場面でどのように活かすことが出来るのかを学生自身が学ぶ場でもある。同時に兼ねてより申請代表者が「呼吸法」のプログラムを提供し、活動している健やか学級等へも共に出かけ、「呼吸法」がどのように「歌唱-声を出すこと」につながりを持つかを共有し利用者らと音楽を媒介としてふれあい、地域の活性化に貢献する。

活動場所として、①弥栄学区すこやか学級 ②社会福祉法人洛東園 ③NPO法人若者と家族のライフプランを考える会LPW就労継続支援B型事業所「あーと・すぺーす絵と音」の3施設をそれぞれ訪問して、呼吸法と歌唱を中心とした演奏会を行うこととなった。学生たちにおいては、それぞれの場にあったプログラムの構成や、歌詞カードの作成を試みた。

本活動を通して、地域に根差す課題や音楽の持つ可能性を認識し、自らのこれまでの学びをどのように活かすことが出来るかを主体的に探究することになる。それらは、卒業後、それぞれの居住地域で、生涯にわたって活かすことの出来る力を身につけることへとつなげることを目的におき実施した。

実施概要と実施成果

①継続活動

◎弥栄学区すこやか学級「呼吸法」

9月30日(月)・10月21日(月)・11月18日(月)・12月23日(月)

本学級では、呼吸法の他に、体操や多様なプログラムを毎回用意され、活動をされている。その中で、実施時間は15分から20分「呼吸法」を行う時間を確保している。



(写真1:手のひらと呼吸)



(写真2:指先あわせ)

実施内容に関して、自宅に帰っても出来るように、作成した冊子に沿って行う。深呼吸をしながら耳をほぐしたり、息を吸いながら手を開いたり、息を吐きながらこぶしを握ったり、リズムよく呼吸を促すことから始める。その後は簡単な楽曲を口ずさみながら全身がほぐれるように呼吸を促していった。

呼吸法実施による成果として、実施している呼吸法は、①いつでもどこでもできる ②特別な機器や道具がいらぬ ③簡単である というように当然、我々は常に呼吸をしているため、ほんの少し意識を促すだけで身体があたたまり、肩こりの軽減につながったり、気持ちが前向きになったりするなどの感想が得られた。

②新規の呼吸法と歌唱活動

NPO法人「音の風」(本学卒業生である西野桂子氏が主宰)が京都市東山区社会福祉協議会と連携して活動している社会福祉施設へ出かけ、呼吸法と訪問演奏を行った。

◎洛東園での音楽ふれあいサロン

12月19日(木)

おおよそ40分の公演ということで、まず5分程度呼吸法を使った発声デモンストレーションを行い、利用者の方々の緊張をほぐし、歌唱発表時に一緒に歌唱していただけるような雰囲気づくりをしたのちにプログラム発表へ入った。

プログラムは学生が数曲ごとに楽曲の説明や楽曲にまつわるエピソードなど話を挟みながら進めた。

時期がクリスマスということもあり、学生たちは各々衣装の色などに工夫を凝らし、音楽だけではなく場の雰囲気を盛り上げた。



(写真3:演奏発表全体の様子)



(写真4:利用者の方々と一緒に歌唱する様子)

◎LPW音楽交換会

11月7日(木)・12月26日(木)

LPWは、NPO法人若者と家族のライフプランを考える会で、引きこもり支援をされている団体である。引きこもり支援ということで、まずは身体と心の緊張をほぐすために、11月7日に1時間ほど「呼吸法」のみの活動を行った。初対面であったため活動の最初は心身共にかなりの硬直が見られたが、冊子に沿って進めていくうちに打ち解けて様々な感想を述べられるまでになった。

次に利用者と学生たちとの音楽の交換会を企画した。利用者は、普段から会内で音楽を通して活動をしているということで、このような企画をした。

12月26日は、すぐに音楽活動をするのではなく、11月に行った「呼吸法」を思い出してリラックスして音楽を聴き、その後音楽活動が出来るように15分ほど呼吸法での活動を行った。すると、最初はとても緊張していた方々の表情が柔らかくなり、あたたかな雰囲気へと変わった。リラックスできたところで、音楽の交換会と称し、学生たちが用意したプログラムクラシック音楽や良く知られている日本の歌の重唱を

発表した。その後、利用者の方々の音楽を発表いただいた。目の前にいつもと違う人達(学生)がいるため、緊張をしながらも、聴いてもらえる喜びを感じておられるようであった。学生たちは、ジャンルが違っても、「音楽」でこのように心の交流が出来るという事、「音楽」には言葉にしなくても通じ合える力があるという事に気が付けたようであった。

まとめ

今回は、数年間継続で行ってきている「すこやか学級」での「呼吸法」活動に加え、新しく歌唱発表の場を設けたことにより、学生が主体的に学ぶ事の出来る場となった。また、学生たちは音楽での活動の意義を見出し多くの学びを得て、各々の今後の活動へ活かせるような有意義な活動となった。



(写真5:呼吸法冊子など)



(写真6:学生が作成した成果物)

今後このような音楽を通じた活動を継続していくことにより、地域社会と大学との交流が深まることが期待される。

「祇園新橋に生きる女性たち」聞き書きプロジェクト報告

●関係先：祇園新橋住民及び商店経営者

現代社会学部 現代社会学科 准教授 森久 聡

はじめに

本プロジェクトは、祇園新橋地区に住み続けていたり、あるいは商売という形でこの地域にかかわっている女性からライフヒストリーをヒアリングし、聞き書きとしてまとめるものである。それぞれの女性が経験してきたライフヒストリーから祇園新橋の姿を捉え直すことで、祇園新橋に多角的に光を当てることを目指している。このプロジェクトは、2017年度から継続して取り組んでおり、本年度は2017年度と2018年度の調査結果を報告書にまとめる作業に取り組んだ。それゆえに、以下で本プロジェクトの目的と取り組みなどを報告するが、過去の報告と重複する箇所があることを予めご了承頂きたい。

本プロジェクトの社会的な意義と学問的な可能性

日本を代表する伝統都市である京都・祇園新橋という「まち」を女性はどのように生きるのだろうか。戦後の日本社会は、高度経済成長・昭和・平成という大きな社会変動の波を経験してきた。そうしたなかで、女性の社会的立場も大きく変化している。本プロジェクトは、そのような「変化の時代」を生きる個人のライフヒストリーに焦点をあてることで、マクロな社会変動が具体的にどのような現実となってその個人の目の前に立ち現れるのか、を描こうとするものである。さらに都市社会学では伝統都市を対象にした研究蓄積はそれほど多くない。また女性という視点による研究も同様に少ない。そこで、本プロジェクトは「女性」・「伝統」・「都市」という視点から「都市的なもの」を見いだしていこうとした。

また、このような地域の記憶を残していく試みは、近年ますます注目を集めている。地域の歴史を伝える様々な遺跡や文化財など物理的な財産だけではなく、記憶や語りといった無形の財産も意識的に残さなければ散逸する恐れがあるからである。しかしながら、地域社会を支えた人々の記憶が必ずしも残されるわけではない。このように個人の人生経験に光をあてることで、これまで見えてこなかった祇園の別の顔を発見することができるのではないかと。地域社会のもう一つの顔を記録していくことは、地域の記憶を残していくことにつながると思われる。

本プロジェクトの教育的な意義

以上の調査プロジェクトは、学生にとって次の3つの側面において貴重な学習機会となる。1つは学生自身のキャリア教育である。本プロジェクトでは、ヒアリングを通じてひとりひとり様ではない人生を送ってきた先輩女性と向き合うことになった。結婚・出産・子育て・仕事・介護など大きな節

目を迎えた時に先輩達はどのような決断をしてきたのか。これら話をヒアリングで聞くことは、これから社会に出てキャリアを積んでいこうとする学生にとって、自身の将来設計に大いに参考になったであろう。

2つ目は社会的な構造と具体的な現実問題とを往復運動する思考力の養成である。本プロジェクトでは現代社会が抱える諸課題や社会変動を座学で学ぶだけではなく、それらがローカルな地域社会と個人の人生において、どのように具体的な現実問題として現れてくるのかヒアリングを通じて学習した。これらの経験を通じて、全体社会・地域社会・個人の3つの水準で現代の社会的な課題を考察・分析し、解決に向けた行動ができる能力の獲得につながるだろう。

3つ目に2回生で質的調査の経験を積むことで、翌年以降の社会調査系の演習科目や卒論に取り組む基礎体力をつけることができた。社会調査スキルは卒業論文の研究に取り組むにあたって、問題を設定し、解明するのに必要な情報を収集する(調査)、情報を整理し、加工する、新たな情報を生み出す(分析)、といった必須のスキルを身に付けることにつながる。このスキルを2回生の段階で予備的に経験することで、3回生での社会調査スキルの学習がより効果的なものになるだろう。

取り組みの経過

基本的には現代社会学部の演習科目である「演習2」(2017および2018年度の2回生後期)を拠点に一連の現地調査を実施した。まず教室で行う座学として、社会学の入門書として船橋晴俊(2012)を講読し、ヒアリング調査の方法を学ぶために岸ほか(2016)を講読した。また聞き書き形式の都市社会学の成果として、岸(2014)も講読している。さらに、伝統都市としての京都に関する予備知識を増やすために、西尾(2014)および鯨坂・小松(2008)を講読した。これらの文献講読は全員で同じ課題に取り組んでいる。

また文献講読と並行して、以下の地域行事にも参加した。1つは祇園新橋地区で結婚式前撮り写真のマナーが問題となっているため、地域連携研究センターと祇園新橋まちづくり協議会ではマナー向上キャンペーンを実施した。このキャンペーンに教員・学生が参加し、祇園新橋を訪れる観光客にマナー向上をアピールした。また、祇園新橋の伝統的な祭礼行事である「お火焚き祭り」にも参加し、のぼりの設置などの準備と後片づけなどを手伝った。このように地元文化を肌で感じる機会を増やすだけではなく、わずかな時間ではあるが少しでも地元住民との交流を重ねるようにつとめた。

以上の準備を経てヒアリング調査を実施した。実施にあ

たつては履修者を3~4人一組みで計8グループを形成してヒアリングに取り組んだ。合計8人の方にヒアリングをお願いしたが、1名の方は残念ながら都合がつかずヒアリングを実施することができなかった。ヒアリングはいずれも祇園新橋周辺の場所で行われた。ヒアリングの時間は一人およそ1時間30分でなかには2時間ほどヒアリングに応じてくださった方もいた。いずれの方も、はじめは緊張されていたが話し始めて緊張もほぐれると楽しそうに話をしていただいた。

ヒアリングから見えてきたもの

本プロジェクトの趣旨からすれば、7人のヒアリングでは言うことは多くはない。それでも今後の本プロジェクトの展開を見据えて、仮説的にいくつか述べておきたい。

1つは祇園新橋といっても芸者だけの世界ではないということである。祇園新橋に生きる者がみな芸者の世界に関わっているわけではない。そのため、祇園新橋地区は3つの世界が重層しているということが見えてきた。その3つの世界とは、〈芸舞妓の世界〉、〈夜の飲食店の世界〉、〈生活店の世界〉である。〈芸舞妓の世界〉とはいわゆる花街のことで、西尾(2014)で詳細に描かれているように置屋や料亭などの芸舞妓をとりまく様々な産業の集合のことである。〈夜の飲食店の世界〉は、いわゆる居酒屋やバーやスナックなどの飲食店である。そして最後に〈生活店の世界〉とは、祇園新橋地区に住んで生活するために必要な店舗などの世界である。具体的には、美容室や喫茶店、衣料品店や酒屋・コンビニなどが含まれるだろう。

〈生活店の世界〉の住民によると、これら3つの世界は、互いにまったく交わらないという住民もいれば、一定の関わりがある、あるいは深く関わっていると述べる住民もいる。なかには〈芸舞妓の世界〉が実質的なリーダー層であるという見解もある。そして〈夜の飲食店の世界〉は基本的には地域に関わっていないという。ただし〈夜の飲食店の世界〉は元芸妓の店もあるので〈芸舞妓の世界〉と〈夜の飲食店の世界〉は無関係ではない。また〈夜の飲食店の世界〉も、地主やビルのオーナーが地元住民である場合も考えられる。これらの3つの世界がまったく関わりがないというわけではないが、詳細は確認できていない。

以上を踏まえて仮説的に述べると、おそらく実質的に祇園新橋地区を支えているのは生活店の世界だと思われる。一般に「祇園」といえば〈芸舞妓の世界〉と〈夜の飲食店の世界〉が代表されるが、町内会の担い手やさまざまな地域団体、伝統的な祭礼行事の役割分担、行政組織との交渉など地域生活の様々な面で登場するのは〈生活店の世界〉の住

民である。そのため地域自治という面では〈生活店の世界〉の住民が中心になっていると思われる。しかし店舗兼住宅という居住形態がほとんど失われた現在、町内会や各種団体の担い手は減っており、地域自治の担い手がなくなる寸前の状況にある。もし地域自治の担い手である〈生活店の世界〉の住民がいなくなったとき、〈芸舞妓の世界〉と〈夜の飲食店の世界〉だけの地域社会がどのように変化していくのだろうか。

このように祇園新橋の内部だけではなく、祇園新橋は外部社会との接点も豊かであることが分かった。この地域の家に嫁いできた人もいれば、たまたまこの地域に土地と建物を購入する機会に恵まれた人もいる。この地域に生まれ育ちながらもいったん外の世界に出て、外の世界で学んだことをもって戻ってきた人もいる。外部の人間でもある祇園新橋を訪問する客がもたらす影響も少なくない。その意味では祇園新橋は外部社会との関わりを保ちながら社会全体の変化の波のなかで存続してきた都市社会であって、都市のなかにある村社会ではない。このことを具体的に示すことができれば良いと思う。

最後になるが、今回の事業実施にあたっては多くの方々にお世話になった。ヒアリングに応じていただいた方を始め、その家族の方々にもたくさん心遣いをしていただいた。また地域連携研究センターのサポートなしに祇園新橋でヒアリングすることはできなかった。本プロジェクトを支えてくれた多くの方に心より御礼申し上げる。

文献リスト

- 船橋晴俊, 2012, 『社会学をいかに学ぶか』 弘文堂
 岸政彦, 2014, 『街の人生』 勁草書房
 西尾久美子, 2014, 『おもてなしの仕組み——京都花街に学ぶマネジメント』 中央公論新社
 鯉坂学・小松秀雄, 2008, 『京都の「まち」の社会学』 世界思想社
 岸政彦・石岡文昇・丸山里美, 2016, 『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』 有斐閣



図 2017年度の聞き書き報告書

東山区における高齢者のための地域福祉活動の実態調査

●連携先：京都市東山区粟田地域包括支援センター 京都市東山区社会福祉協議会

地域連携研究センターコーディネーター 岡崎 昌枝

1. 実施の目的

高齢化の進行や高齢世帯や高齢単独世帯の増加などによって家庭内の支えあい、さらには地域社会の紐帯は弱体化している。そのようななか地域福祉活動は、住民が主体となり、ボランティア、NPOなどが行政による福祉サービスだけでは対応できない生活課題について取り組んでいる。その活動は、住民と行政の協働のもとに行われるものである¹⁾。地域福祉活動を積極的、安定的に継続できるようにするためには、担い手、活動場所の確保は必要不可欠である。しかしながら高齢者の地域福祉活動は、元気な高齢者が担い手の中心となっている場合が多い。

東山区は、高齢化率34.5%と全国平均を7.8%²⁾も上回る「都市型高齢化地域」である。このため東山区の高齢者のための地域福祉活動においても担い手の高齢化や担い手不足などの問題が生じているのではないかととの問題意識から、量的・質的調査によって実態を把握し、地域が抱える課題を明らかにする。京都女子大学が今後、東山区における地域連携活動を展開するための基礎情報として活用することを本調査の目的とする。

2. 調査の概要：以下の3つの調査を実施した。

①京都市における市民主体の高齢者福祉活動の運営方法についての予備調査：地域包括支援センター（洛東園）を事例に高齢者の健康教室の実態を調査した。

②高齢者の地域福祉活動（すこやか教室及び居場所づくり）の実態に関するアンケート調査：調査対象は東山区内の全てのすこやか学級と居場所づくり活動。主な調査項目は、運営責任者・スタッフ、参加者、活動内容、地域社会の4点。調査票の配布は、東山区社会福祉協議会（以下、社協）の協力の下、すこやか学級および健康教室については、学区社会福祉協議会の代表者会の際に調査の意図を説明したうえで配布。居場所づくり活動については社協より配布。回収方法はいずれの調査も本学地域連携研究センター宛てに回答者からの直接郵送。配布数43通、有効回答数26通、全体回収率60.5%。

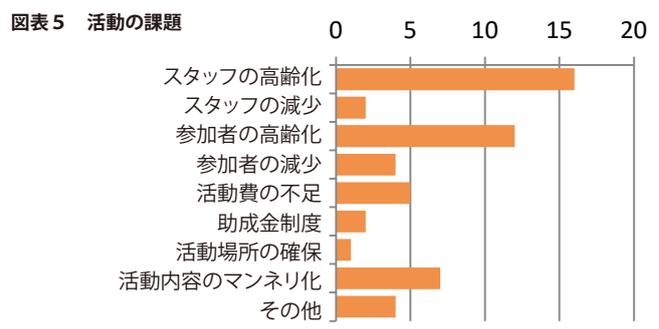
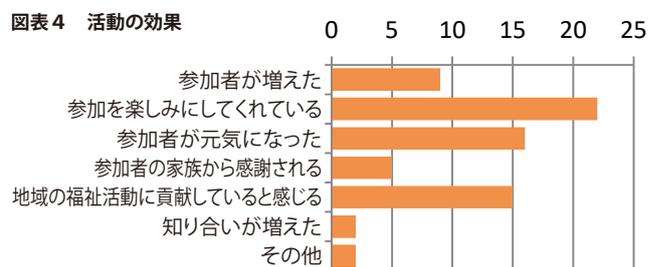
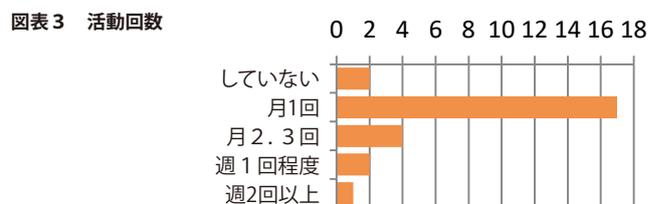
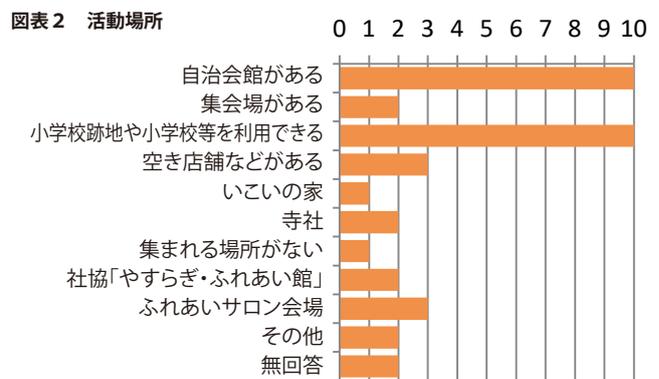
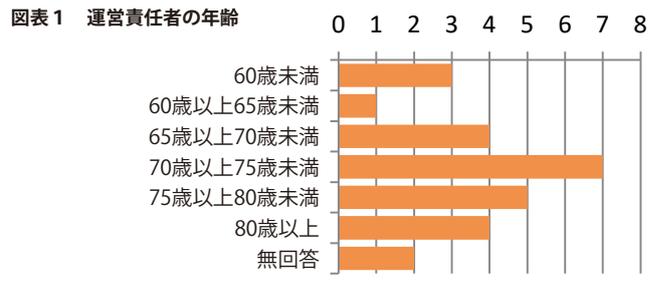
③量的調査結果から導き出されたすこやか学級と居場所づくり活動の特徴的な事例についての聴き取り調査：4件の活動先に聴き取り調査を実施した。調査項目は、組織形態も含めた活動の工夫、効果、課題、の3点である。

3. 結果の概要

(1) アンケート調査

①運営責任者の年齢、②活動場所、③活動回数、④活動

の効果、⑤活動の課題について各項目で高齢者活動特有の特徴がみられた。①運営責任者の年齢：運営責任者は70歳以上の高齢者が16名（61.5%）、80歳以上の責任者も4名（15.4%）いた（図表1）。



②活動場所：自治会館(10件)や小学校跡地や小学校を活用(10件)など公共の施設を活用している団体が多い。空き店舗(3件)、児童館(1件)、個人宅(1件)など多様な場所の利用もみられた(図表2)。③活動回数：月1回の活動が17件(65.4%)と最も多く、月2～3回の活動は4件(15.4%)、活動を行っていないとの回答も2件(7.7%)みられた(図表3)。④活動の効果(複数回答)：参加者が楽しみにしてくれている22件、参加者が元気になった16件、地域の福祉活動に貢献していると感じる15件であった(図表4)。参加者の声や変化が活動の原動力となっていることがわかった。⑤活動の課題(複数回答)：スタッフの高齢化16件、参加者の高齢化12件、活動内容のマンネリ化7件であった(図表5)。高齢者の地域福祉活動を担うスタッフもまた高齢者であることが明らかとなった。

(2) 聴き取り調査

アンケート調査結果から導き出されたすこやか学級と居場所づくり活動の特徴的な事例について聴き取り調査を実施した。調査項目は、組織形態も含めた活動の工夫、効果、課題、の3点である。

聴き取り調査先は、①ともいき食堂(栗田学区)：運営組織が株式会社であること、参加者の年齢層・参加者層が増加した、②新道健康すこやか学級(新道学区)：リーダーが変更しても30年継続、参加者やスタッフメンバーが変更しつつも参加者数は安定、③小松谷児童館こども喫茶：児童館の児童とスタッフによる運営、児童館に高齢者を招くスタイル、④貞教学区の取り組み(ア.しあわせの森、イ.貞教サンデーモーニング、ウ.貞教健康すこやか学級)：1学区内で多様な活動を行なっている、以上4件である。

聴き取った内容からA)運営組織、B)運営スタッフ、C)参加者、D)活動内容(開催回数、開催場所、周知方法、活動プログラム)、E)工夫、F)効果、G)課題について以下の通りまとめた。

【聴き取り調査結果】

①ともいき食堂(栗田学区)

A)株式会社、B)会社スタッフとボランティア2名、C)20歳～80歳、地域年齢制限なし、D)開催回数：月1回、開催場所：会社を開放、周知方法：チラシ等の他SNS、活動プログラム：食事を準備し調理は参加者、食後レク、E)少ないスタッフで運営できるメニュー、SNSの活用、商店街との良好な関係、F)知り合いが増え交流が活発、G)食事の片付け、メニューによる参加者の偏り、内容のマンネリ化。

②新道健康すこやか学級(新道学区)

A)社会福祉協議会、B)学区内の民生委員や学区社協のメンバー、C)新道学区の65歳以上の方、(登録制)、D)開催

回数：月1回、カフェ月1回計2回、開催場所：元新道小学校、周知方法：年度初め案内と次回周知案内、活動プログラム：食事と体操、レクもしくはモノづくり、E)無理せず実施、F)外出の機会の増加、G)助成金の手続きが難しい

③小松谷児童館こども喫茶(修道学区)

A)児童館、B)児童館スタッフと学童の子ども、C)地域の高齢者と児童の保護者等、D)開催回数：月1回、開催場所：児童館、周知方法：チラシ広報誌とポスティング、活動プログラム：喫茶の提供、E)こどもが喫茶業務を担当、F)児童館の周知と子どもの体験、交流の場、G)地理的・建築ともにバリアがある

④貞教学区：ア.しあわせの森、イ.貞教サンデーモーニング、ウ.貞教健康すこやか学級(貞教学区)

A)ア.個人、イ.貞教学区各種団体、運営組織、ウ.社協、B)ア.個人、イ.各種団体から5名スタッフ選出、ウ.社協スタッフ、C)ア.少数固定化、イ.多く参加、ウ.貞教学区住民の参加、D)開催回数：ア.月3回、イ.ウ.月1回、開催場所：ア.個人宅、イ.ウ.ふれあいサロン、周知方法：ア.自宅前に看板、イ.学区掲示板、ウ.年度初め案内と次回周知案内、活動プログラム：ア.特に決めていない、イ.喫茶の提供、ウ.体操、食事、レク、E)ア.無料で近所つき合いの延長、イ.輪番制による負担軽減、ウ.安く利用できるので参加者が多い、F)ア.参加者が楽しみにしてくれる、イ.多くの活動により住民に認知してもらえる、ウ.世代を超えて協力しているので認知してもらえる、G)ア.固定化、イ.時々当番を忘れる、ウ.担い手の高齢化

4. おわりに

東山区における高齢者の地域福祉活動は、小学校跡地、空き店舗などを活用して活動場所が確保されていた。各活動が月1回程度であっても複数の活動が実施されているため、高齢者には複数の活動への参加機会がある。そのため地域福祉活動は、高齢者の健康維持に有効に機能していると想定される。しかし運営スタッフの高齢化は進行しており、活動の継続には、若い世代や広範な地域の力を取り込むための努力と工夫が必要である。

今後は、この調査結果を地域の福祉活動実践者と共有し、東山区の高齢者のための地域福祉活動が安定的に継続できるよう微力ではあるが支援していきたいと考えている。

参考資料

- 1)厚生労働省：これからの地域福祉のありかたに関する研究会報告書(2008)
URL:<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/03/s0331-7.html>
- 2)国勢調査(2015)；日本の高齢化率26.7%より算出

京都女子大学が提供する「多様な学びの場」 ～地域連携研究センター事務局より～

本学が社会に幅広く提供する学習機会として主なものに「公開講座」「生涯学習講座」「履修証明プログラム」「リカレント教育課程」がある。(図1)

2019年度も多くの学部・学科や研究所の先生方の協力を得て、公開講座を11件(うち1件は台風による中止)、生涯学習講座を17件企画することができた。特に、生涯学習講座については、昨年度より有料化(1シリーズ3,000円)しているが、どの講座も熱心な受講生が集まり、講座終了後も講師への質問や内容に関するリクエストが寄せられ、また、リピーターの獲得にもつながっており、講座の質向上に寄与するものとなっている。

公開講座、生涯学習講座の受講生は、その教養的なテーマと開講形態(主に平日昼間開講)によることから、中高年のシニア層が多い(一部小中高生向けもあり)。また、公開講座や生涯学習講座の受講をきっかけとして、じっくりと学びたい方のために「履修証明プログラム」制度がある(P38参照)。こちらは、学部生と同じ授業を履修できるプログラムであり、特

定のテーマに基づき探求することができる。

一方で、リカレント教育課程は、「もう一度働きたい」「キャリアアップしたい」女性を応援するプログラムであり、就業経験のある女性が再度社会復帰するための学び直しの間として2018年度よりスタートし、1期生、2期生あわせて39人の20代～60代までの社会人女性が学んできた。2020年度からは、従来の通学コースに加えて、厚生労働省委託事業 教育訓練プログラム開発事業としてeラーニングコースを開設することとなった。メインターゲットは働く女性である。Society5.0の中で求められる基礎的なRPAやAIの知識やスキルを効率的にeラーニングベースで身につけることが可能であり、これまで働く女性からの「勉強したいが、仕事があるので平日に通えない」といった声にこたえるプログラムを構築している。ライフステージが変わっても、学び続けられる環境がそろったといえる。

図1 多様な学びの場

対象世代	性別	プログラム (コンテンツ)	備考
20代～	男女	生涯学習講座	有料 一部小中高生対象
20代～	男女	公開講座	無料 一部小中高生対象
20代～	女性のみ	履修証明プログラム	有料
20代～	女性のみ	リカレント教育課程 cコース(通学コース)	有料
20代～ (働く女性対象)	女性のみ	リカレント教育課程 eラーニングコース	無料 2020年度に限り無料



2019年度 公開講座一覧

講座名	講題	開催日	講師	
食物栄養学科公開講座 「食事と脳」	食事・栄養でこんなに変わる、こどもの脳 今日からできる認知症予防 ～あなたはその秘訣を知っていますか?～	6/29(土)	本学教授 国立循環器病研究センター 脳神経内科部長	辻 雅弘 猪原 匡史
児童学科公開講座	木育によるワークショップ ～木の香りと手触りを感じながら作品をつくろう!～	7/6(土)	岐阜県立森林文化アカデミー 教授 本学 教授	松井 勅尚 矢野 真
生活デザイン研究所 公開講座	「俵屋宗達・養源院 障壁画の美とその力」 饒舌館長口演す 養源院の実地解説	10/12(土) 台風で中止	静嘉堂文庫美術館館長 養源院 副住職	河野 元昭 吉水 行友
人文学会公開講座 ドイツ文学における幽霊、 ドッペルゲンガー	アイヒェンドルフの『大理石像』(1819)における 自我とドッペルゲンガー 幽霊の出現ドイツ文学-18世紀から20世紀初頭まで	10/16(水)	本学講師 京都大学大学院文学研究科教授	藤原 美沙 松村 朋彦
国文学科公開講座	日本語史の研究と「古文」「漢文」 ーそもそも、古文・漢文って何?ー 谷崎潤一郎と「孝」の問題	10/21(月)	京都大学 講師 高知大学 准教授	田中 草大 田鎖 数馬
英文学科公開講座	言語獲得と文法理論 映画に見るホロコーストの現在形とユーモア	10/29(火)	本学教授 本学准教授	松原 史典 中村 善雄
史学科公開講座	ヴァイキングによるルーン石碑の建立活動 栄西と京都・奈良	11/8(金)	立教大学 教授 本学准教授	小澤 実 小原 嘉記
生活造形学科公開講座 オリンピックと スポーツウェアの世界	パフォーマンスを最大限に発揮するための アルペンダウンヒルスーツの開発 速さを追求する競泳用水着の機能設計開発 競技力向上を追求したスプリントウェアの開発	11/9(土)	(株)デサント ミズノ(株) (株)アシックス	戸床 文彦 田中 啓之 田川 武弘
	パネルディスカッション 『2020年の東京オリンピック・パラリンピックを 100倍楽しむために』	11/9(土)	パネリスト (株)デサント ミズノ(株) (株)アシックス オギノ繊維技術士事務所 オーガナイザー 本学教授 総合司会 本学教授	戸床 文彦 田中 啓之 田川 武弘 荻野 毅 諸岡 晴美 榎本 雅穂
栄養クリニック公開講座 食品は美と健康の サポーター	食べ物で女性美と骨を護ろう ー葛イソフラボンの護美力と骨粗鬆症予防力ー 新しい食物繊維「セルロースナノファイバー」	11/9(土)	本学教授 本学栄養クリニック研究員 京都大学大学院 農学研究所生存圏研究所 生物機能材料分野 准教授	河村 幸雄 阿部 賢太郎
現代社会学科公開講座 『移動する「家族」』を考える: 民族誌的ドキュメンタリー の上映を通して	ドキュメンタリー上映 「多文化家族への想像力」 『移動する「家族」』の映像エスノグラフィー実践: リサーチ・オン・ザ・ムーブの試み	11/30(土)	ファンリレーター 本学教授 慶應義塾大学非常勤講師 司会・コメンテーター 本学准教授	嘉本 伊都子 大橋 香奈 奥井 亜紗子
教育学科音楽教育学専攻 公開講座 日本の「作曲」回顧と展望 ー創作から見る近代化・ 洋楽受容151年の歩み	第一部 講演 展望:151年目の日本の「作曲」 ー「大きな物語」と「小さな物語」を結ぶ音楽創造へ	11/30(土)	本学准教授	佐藤 岳晶
	第二部 レクチャーコンサート 回顧:邦人作品で振り返る洋楽受容の151年 ー文部省唱歌から知られざる前衛作品まで	11/30(土)	本学教授 本学教授 本学教授 本学教授 本学発達教育学部教育学科 音楽教育学専攻学生	田中 純 大谷 正和 土居 知子 ガハブカ 奈美

2019年度 生涯学習講座一覧

講座名	各回の講題	開催日	講師
いつまでも、いくつになってもよい姿勢	①良い座り姿勢・立ち姿勢とは ②姿勢がいいと呼吸もいい ③良い姿勢・良い呼吸の恩恵と方法	6/4(火) 6/18(火) 6/25(火)	本学地域連携研究センター 客員研究員 原田 奈名子
作曲家探求シリーズ② J.S.バッハ	①バッハの音楽作品の作曲背景に迫る ②19世紀のバッハ復興運動—メンデルスゾーンによる「マタイ受難曲」復活上演への道— ③バッハの鍵盤作品の魅力を探る	6/4(火) 6/18(火) 7/2(火)	本学教授 ガハブカ 奈美 本学教授 関口 博子 本学教授 大谷 正和
『徒然草』のなかの 京都・東山	①都人と東人—共生空間としての東山 ②渡元僧道源の素性—兼好法師のお友だち— ③閑院内裏と將軍御所—鎌倉時代の六波羅	6/13(木) 6/27(木) 7/11(木)	本学宗教・文化研究所 客員研究員 野口 実 本学名誉教授
環境問題におけるリスク	①人工化学物質：水銀、食品添加物、化粧品 ②放射線と電磁波 ③環境リスク論	6/15(土)	本学教授 霜田 求
親子で作るトートバッグ	①使用の目的を設定し、設計する ②具体的な手法や素材を選択する ③手を動かして作る	8/3(土)	本学准教授 渡邊 敬子 本学教授 青木 美保子 本学准教授 渡邊 敬子 本学教授 青木 美保子
夏休み自由研究の ヒントをGet!	①東山の自然探検隊になろう! ②糸を使ってアクセサリやマスコットを作ろう! ③プログラミングに挑戦しよう!	8/6(火)	本学教授 宮野 純次 本学教授 表 真美 本学教授 坂井 武司
ロコモ・サルコペニア予防 —健康長寿を目指して—	①ロコモ・サルコペニアとは? ②体組成と運動器のチェック ③暮らしの中に運動をとりいれよう(実技)	10/19(土)	本学教授 間瀬 知紀 本学教授 森 博文 本学教授 新矢 博美
「いつまでも、いくつになってもよい姿勢」 エクササイズ編	①背骨を動かして大きい呼吸を。 よい姿勢は肩甲骨もよく動く。 ②大きな呼吸のために、横隔膜と肋骨と 背中とお股の間を動かす。 ③立つ、歩く、その土台は足部。 足の手入れでよい姿勢を導く。	10/24(木) 10/31(木) 11/7(木)	本学地域連携研究センター 客員研究員 原田 奈名子
草創期の本願寺 —その歴史と親鸞聖人 からの継承	①親鸞聖人と本願寺 ②本願寺第三代覚如上人の活躍 ③親鸞聖人から覚如上人への継承	10/25(金) 11/8(金) 11/15(金)	宗教・文化研究所 兼任研究員/ 本学准教授 黒田 義道
知って得する「染色」のはなし —「染め」でECOな生活を—	①「染色」とは? ②「染料」の種類はこんなにあるの! ③知っておきたい「植物染料」の染色	10/26(土)	元本学教授 (公財) 覚誉会 繊維染色研究所 研究員 坂田 佳子
古典和歌にみる 日本人の感情	①「鐘」の意象(イメージ)と無常感 ②「鐘」の意象にみる日中文化の違い ③「鹿鳴」と鹿の鳴き声	11/7(木) 12/12(木) 1/16(木)	本学教授 劉 小俊
フランス音楽の魅力: ファンタジー(幻想)の世界から	①ベルリオーズと《幻想交響曲》 ②ラヴェルと《子どもと魔法》 ③プーランクと《ティレジアスの乳房》	11/12(火) 11/19(火) 11/26(火)	本学准教授 田崎 直美
情報メディアの変遷をたどって —印刷本から電子の時代へ—	①羊皮紙と写本の時代 ②出版革命と印刷本の時代 ③ネットワークと電子の時代	11/16(土) 11/30(土) 12/14(土)	本学図書館司書課程助教 坂本 俊

講座名	各回の講題	開催日	講師
すてきに長寿 ～脳と心の健康を保つ秘訣～	①元気な高齢者になる ②認知症を予防する ③幸せな老後を送る	11/26(火) 12/10(火) 12/24(火)	本学教授 岩原 昭彦
「京都画壇の近代化・ 竹内栖鳳」	①「竹内栖鳳 鶴派の時代」 ②「竹内栖鳳 観花図」 ③「竹内栖鳳 渡欧と渡欧後の絵画」	11/27(水) 12/4(水) 12/11(水)	本学名誉教授 廣田 孝
愛と性の哲学史	①ルソーの女性論メアリ・ウルストンクラフト のルソー批判、カントの結婚論 ②ショーペンハウアーとキェルケゴールの 女性論・恋愛論 ③J. S. ミルの『女性の解放』とバートランド・ ラッセルの『結婚論』	2/8(土) 2/15(土) 2/22(土)	本学教授 江口 聡
清水寺創建ドラマ秘話	①裏の主役は、金色に輝く音羽の滝。 ②鹿が、しっかり名脇役。 ③エキゾチックな、小道具の履。	2/14(金) 2/21(金) 2/28(金)	本学教授 中前 正志

2019年度 履修証明プログラム

2019年度も社会人女性を対象に、以下の4講座の履修証明プログラムを開講し、「仏教プログラム」に1名、「京都の歴史と文学プログラム」に2名、「中国文化と言語プログラム」に1名の申し込みがあり、応募資格を満たした4名とも履修を許可し、プログラム修了要件を満たした3名に対して履修証明書を交付した。

新型コロナウイルス流行の関係で、修了式は中止となったが、履修生の感想として「生きた京都の歴史と文化に触れる機会が多く、大変勉強になった。」「大学生との交流が新鮮で楽しかった。」等の声が聞かれ、好評を博した。一方で、履修生は全員前年度からのリピーターであるため、「すでに科目をほぼ履修してしまった。新たな科目を履修したい。」「ほかに新たなコースを設けてほしい。」等の要望も寄せられた。

当プログラムも、2020年度には5年目となるため、リピーターが継続して学び続けられるように、また、新規の受講生の獲得のために魅力あるコース設置や、科目等の見直しが必要である。

●京都案内マイスター養成プログラム

- ・京都英語案内マイスター養成 初級コース
- ・京都日本語案内マイスター養成 初級コース
- ・京都マイスター養成 初級コース

●仏教プログラム

●中国文化と言語プログラム

●京都の歴史と文学プログラム

「いつまでも、いくつになってもよい姿勢」 3回シリーズ

地域連携研究センター客員研究員 原田 奈名子

はじめに

2019年度は、前期と後期で内容が異なります。前期は昨年同様、以下のテーマのもと、主に講義を行いました。

第1回 6月 4日(火): 良い座り姿勢・立ち姿勢とは

第2回 6月18日(火): 姿勢がよいと呼吸もよい

第3回 6月25日(火): 良い姿勢・良い呼吸の恩恵と方法

1. 前期

講義中心とはいえ、講義だけでは「良い座り姿勢・立ち姿勢」は具体的にどこがどうなっているのかわかりません。主に以下のような内容で行いました。実際の呼吸数は?呼吸の時、胸郭のどこを使っているか?座り姿勢から立ち姿勢へ(その逆も)移行するとき、どこをどのように使うか?どこに意識を向けるか?などなどやはり実技を伴いませんと実感がありません。加齢に伴い筋肉が育ちにくくなるのは寿命のメカニズムとして組み込まれています。ならば、それに代わって何をしましょう?「知」へのフォーカスに尽きますね。もちろん、筋トレが不要だというわけではありません。それと併せて、いやそれ以上に重点を置きたいのは「知」です。息は「自(ら)」の「心」と書きます。何ゆえに、呼吸に力点を置くか、です。よく高齢になると「頑固になる」「融通が効かなくなる」とかいいますね。そうなのです、胸郭が動かなくなって呼吸数が多くなる、つまり交感神経が過度に働きやすくなるからです。さて、心持ちもさることながら呼吸には「内呼吸」という細胞単位の物質交換の呼吸があります。この内呼吸に注目するのは「ミトコンドリア」のはたらきを活性化するためです。内呼吸が活性化してミトコンドリアを増やすとエネルギーに満ちた若々しいという印象の人になります。加齢に伴ってなりがちな猫背(円背、内肩)ですと、呼吸数が多くなります。呼吸から姿勢をととのえましょう、姿勢を整えゆったり大きい呼吸をしましょう。

アンケートによると成果は以下のようにまとめられます。

○成果

・満足が83%、やや満足が14%と好評だった。意見として、後期の実践編が楽しみ、日常に役に立つことばかり、呼吸の重要性を学んだ、等、内容が受け入れられたと思われた。具体的には、骨格の仕組みや呼吸の大切さが良く分かり、とても有意義な講座でした。

・講義と同じ位の時間を実演にかけて頂き、体を動かして楽しく受講させて頂きました。/・立ち方、座り方がすごく参考になって、意識してやるとすごく楽な事がわかりました。

・先生のお話しが楽しくて、1時間半があつという間でし



写真1 講座の様子:肘でまるを描く



写真2 講座の様子:紐を使ったストレッチ

た。デスクワークで姿勢が悪くなりやすかったので、ぜひ実践したいと思います。

・食事や認知症へのニーズがあった。関連するが、姿勢に特化するとそこまでは広げられないと考える。

△提案(課題ではない)

・予想外に遠くから参加され、2時間半もかけて来る方も見受けられた。京都府外からの参加者も多く、大阪・奈良・兵庫・滋賀・三重からだった。

⇒これを受けると、大阪オフィスでの開講等、学外開講も視野に入れてもいいのではないかと考える。

△時間帯

・10時半から90分で行った。89%が10時半開始でよいと答えていたが、原田は、片付け等を考えると10時開始の11時30分終了の方がいいと考える。

2. 後期

後期は、2018年度、2019年度の既受講者対象に「いつまでも、いくつになってもよい姿勢－エクササイズ編」と題して以下のテーマのもと、幼児教育棟の和室にて、初の試みとして実技中心に行いました。

第1回 10月24日(木): 背骨を動かして大きい呼吸を。よい姿勢は肩甲骨もよく動く。

第2回 10月31日(木): 大きな呼吸のために、横隔膜と肋骨と背中とお股の間を動かす。

第3回 11月 7日(木): 立つ、歩く、その土台は足部。足の手入れでよい姿勢を導く。



原田奈名子(2006) 暮らしの中でどう動いている?. 草土文化:P21

主な実技項目は、立ち姿勢で行う<感覚固有受容器を目覚めさせるワーク>。仰臥位で行う<胸を開くワーク><脚の付け根を伸ばすワーク><肩甲骨のワーク><呼吸のワーク>です。からだのやる気を引き出す感覚固有受容器を目覚めさせるワークはどなたもおできになって好評でした。お一人お一人のお身体が全く異なり、何か一つ提案しても、すんなりおできになる方と、いやはや何とも動かない方もいらっしゃって、想像していたよりずっと難しかったです。幸い、原田のワークに慣れている卒業生にお手伝いをお願いできたので、一人で行うよりずっと丁寧に一人一人に接することができたと思います。とはいえ、空間的にも、個別指導の観点からも多くの課題が見いだせました。

アンケートによると成果は以下のようにまとめられます。

○成果

・好評だった。理由は、個別対応を心掛けたことかと思う。

第3回目の要望も多かった。

●課題

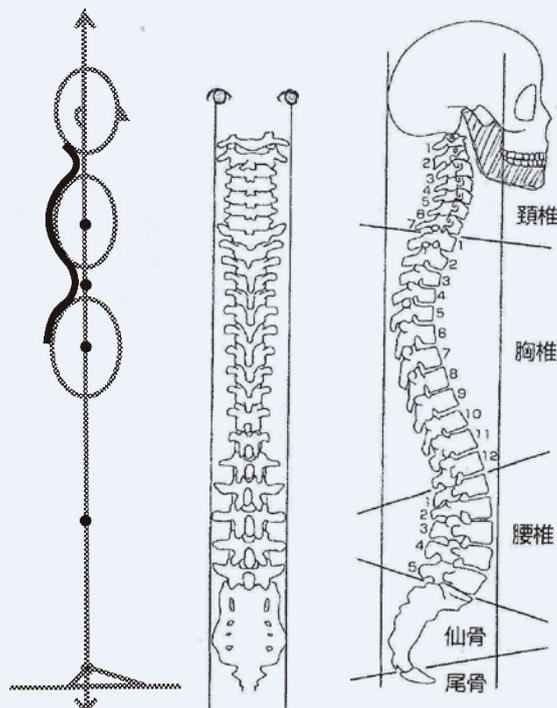
・受講者数について

募集人員は30名だったが、実際は23名の受講者でもスペース的にやや窮屈だったこと、実際に動いていただく個別指導を要する方が多く、人数的に限界だった。内容を変えないならば、募集人数を20人以下にすることを提案したい。

・指導について

エクササイズ編の実施は無謀と思えるほど、難しい方が多く、かなり個別指導になった。幸い、創作舞踊部の卒業生に3回ともお手伝いをお願いした。彼女がいたからできた感もあり、再度実施となるとアシスタント抜きで可能かを考える。

・時間帯を前学期より30分はやめた。よって、やや早いという意見が増えた。また90分は短いという意見も見られた。



配布資料より

背骨はまっすぐ?!

図左から

○背骨のカーブ、

(日本ではSカーブと教えるが、この図は仙骨まで入れてWカーブを示す。頭と、尾骨まで入れると6カーブになる)

○背骨を後ろから見たところ、(ほぼ黒目の幅)

○背骨を横から見たところ

(後ろは後頭部あたり、前は奥歯のかみ合わせより前までカーブしている)

リカレント教育課程 ～働くための学びの場～

概要

2018年度「大学連携京都府リカレントプログラム」の発展講座として開講したリカレント教育課程を2019年度からは、本学の独自プログラムとして開講することとなった。

就業支援については、講座期間中のキャリアカウンセラーによる個別カウンセリングに加え、学内の専従コーディネーターが、就業意識や就業状況の確認、個別相談などをきめ細かく行い、本年度も89%と高い就業率を達成することができた。2月からの新型コロナウイルス感染拡大の影響により、2名が就業を取り消されるという事態が起こったが、今後もフォローを行う予定である。

資格取得についても初級簿記受講者14名の中から、簿記3級試験に挑戦した7名が合格を果たした。

今年は、保育希望者が、昨年度より3割減少したが、これは、保育費用の一部負担が要因と思われる。(昨年度は京都府の補助があり無償で実施。)未就学児を持つ子育て世代が減少したことで、昨年度は全体の35%を占めていた35歳以下の受講者が、今年度は10%となり2割以上減少した。

2020年度からは、東山区保育園協議会与タイアップし、当該協議会に加盟する保育園を利用できるしくみが整った。

開講期間

2019年10月1日(火)～2020年2月17日(月)

実施場所

京都女子大学 J校舎

スケジュール

2019年5月 池上彰講演会・リカレント教育課程説明会
2019年6～7月 リカレント教育課程説明会(2回)
2019年9月 オリエンテーション開始
2019年10月1日 入講式
2019年12月23日 中小企業家同友会との交流会(8名)
2020年2月17日 修了式
2020年2月17日 成果報告会
2020年2月17日 企業説明会

*期間中キャリアカウンセリング(コーディネーターによる個別面談+キャリアカウンセラーによる個別カウンセリングを5回実施)

開講科目

●キャリア形成科目

・ライフキャリアデザイン

- ・英語基礎/オフィス英語
- ・パソコン基礎/実践
- ・企業会計
- ・初級簿記
- ・現代ビジネスと起業
- ・ロジカルライティング
- ・VMD(ビジュアルマーチャンダイジング)
- ・人事総務
- ・秘書業務
- ・マーケティング戦略とブランドマネジメント

●基礎教養科目

- ・市民と社会(女性の多様な生き方を探求する)
- ・服飾美学
- ・金融論
- ・食空間プロデュース論
- ・産学連携講座A1(三井住友銀行)
- ・産学連携講座A2(野村證券)
- ・産学連携講座A3(阪急電鉄)

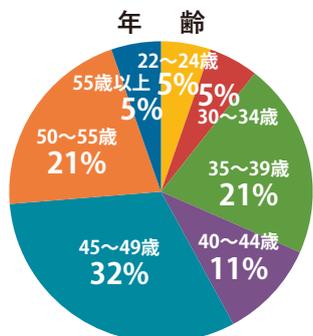
成果報告会 / 企業説明会

2月17日に行われた成果報告会では、修了生が受講前後での就業意識の変化やこれからのキャリアプランについて発表を行った。講座のスタート時には具体的なキャリアプランを持たなかった受講生が今後の自らのキャリアについて、しっかりと発表する姿に、大きな成長を感じる機会となった。

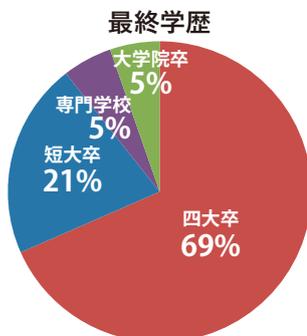
成果発表会後には、カフェ方式で企業説明会が開かれ、7社の参加を得た。修了生と企業担当者の活発な意見交換がみられ、有意義であった。



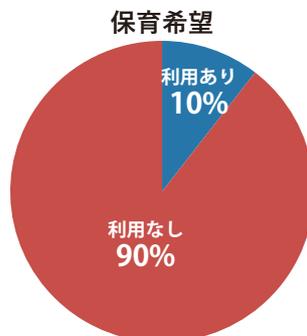
履修者 DATA



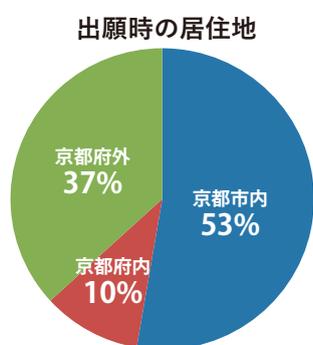
40代を中心に20代~60代まで幅広い年齢層が受講。



4年制大学卒業者が約7割。



保育費用の一部負担により、利用者は1割にとどまった。



京都市以外の居住地

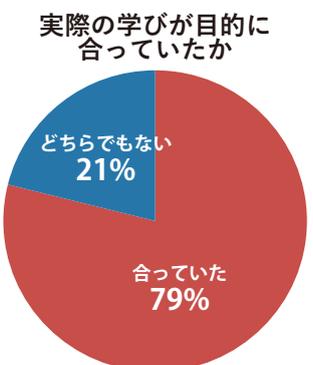
- 京都府外
- ・石川県
- ・富山県
- ・滋賀県大津市
- ・大阪府茨木市
- ・奈良県橿原市

- 京都府内
- ・京田辺市
- ・南丹市

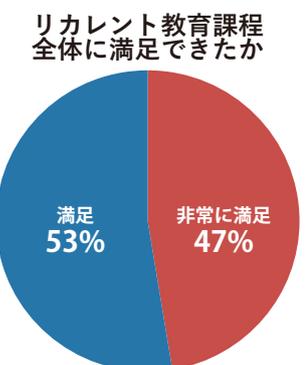
履修者の声（抜粋）

- 現在の社会情勢や女性として働くことの意味、社会人としての自分のあり方について今後のキャリアプランを考えるよい機会だった。
- 様々な年代の方と皆で前を向いて日々学び頑張るからこそ、より学びが深まった。社会人になって改めて学び直すことは自己成長につながる。
- 再就職を目指す人のみならず、広く学び直したいものにとって良い機会だった。
- 時間をやりくりする練習もでき、仕事を始める環境を整えられた。
- 新しい自分に出会えたので、また新たな挑戦してみたい。
- 義務感で学んだ20代の学生生活と比べて、目的があって身銭をきって始めた学生生活は有意義なものだった。
- 仕事をするを前向きに考えられるようになったので、一步踏み出してみようと思う。
- 同期生だけでなく、第一期の修了生の方とも話す機会が持て、キャリアについての考えを聞けたり、就業についての情報をいただいたりできたのは、大学に通ったからできた貴重な体験となった。

リカレント教育課程への満足度

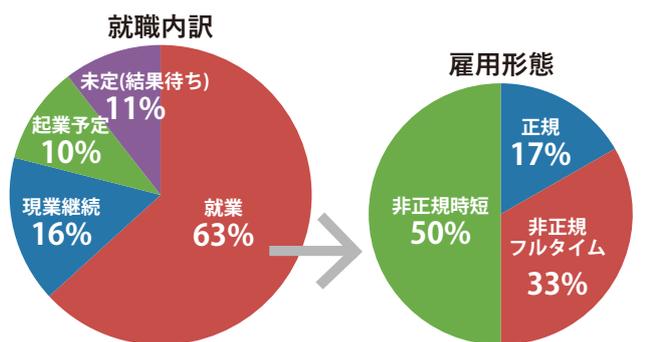


学びが目的に合っていると
する割合が約8割



リカレント教育課程への
満足度は100%

就業の状況（2020年3月末現在）



修了後の就業率は、89%。時短勤務など、自身の生活に合わせた雇用形態を選ぶ割合が半数を超える。

主な活動実績

令和元年(平成31年)

- 4.3 日加ラウンドテーブル開催
- 5.9 池上彰氏によるシンポジウム「池上彰と考えるリカレント」を開催
- 5.9 リカレント教育課程 第1回相談会開催
- 5.16 リカレント教育課程 2019年度募集概要発表
- 5.22 京都女子大学と日本労働組合総連合会で記者会見を実施
- 6.8 リカレント教育課程 第2回相談会
- 6.27 図書館司書課程を履修する学生による「ものしり歩きのひがしやま」(冊子)が完成
- 6.28 東山シニアクラブ連合会と日本語プログラム留学生の交流会を実施
- 7.1～7.12
リカレント教育課程の1次募集
- 7.5 リカレント教育課程 第3回相談会
- 7.18～8.2
リカレント教育課程の2次募集
- 8.10～8.24
発達教育学部矢野ゼミの学生が祇園北地区4町内の地蔵盆行燈絵の製作
- 8.6～8.11
京都府立図書館で「京女サロン」を図書館司書課程受講生が開催
- 9.2 第3回女子大学連携ネットワークミーティング開催
- 9.4 連携課題研究京都信用金庫寄附講義、女性起業家と考える「創業しやすい京都」で学生による最終発表を実施
- 10.1 リカレント教育課程 開講式
- 10.8 鹿児島国際大学 附置地域総合研究所 2019年度清水基金プロジェクト講演会・シンポジウムにて、センター長竹安が、「地域活性化と女性の参画」をテーマに基調講演
- 10.16 大妻女子大学と懇談会を開催
- 11.7 「七条大橋をキレイにする会」の活動に参加
- 11.20 第1回厚生労働省CCP検討委員会^(※注)開催
- 11.21 敬愛小学校(北九州市)小学生のための英語イベント
- 11.25 祇園新橋景観づくり協議会の白川の掃除に参加
- 11.29 連携活動入門を受講する学生と現代社会学部の学生有志が、辰巳大明神のお火焚き祭で幟の飾り付けや護摩木を積むなど準備の手伝いに参加
- 12.25 第2回厚生労働省CCP検討委員会開催

令和2年

- 1.15 第3回厚生労働省CCP検討委員会開催
- 2.4 学内公募型事業「らしつよチャレンジ」「学まち連携プロジェクト」成果報告会を開催
- 2.12 第4回厚生労働省CCP検討委員会開催
- 2.17 2019年度リカレント生修了式・成果発表会・合同企業説明会開催
- 2.17 女性の学ぶ働く生きる応援フェスタ2020(主催:文部科学省 実施主体:特定非営利活動法人全国女性会館協議会)のポスターセッションに参加
- 2.17 NTT西日本と「女性のためのリカレント教育課程」プログラムの共同開発について、合同記者発表を実施
- 2.19 第5回厚生労働省CCP検討委員会開催

(※注)厚生労働省委託事業「教育訓練プログラム開発事業(2年開発コース)」
(本学の事業名称:非正規雇用で働く女性のキャリアアップ・キャリア
チェンジ支援プログラム)を実施するために設置された委員会

協定締結先と連携協定内容一覧

協定締結先	協定締結日	連携協定書内容	(協定締結日順)
京都信用金庫	2004/10/18	産学連携活動	
東山区役所	2008/2/26	まちづくりの推進に関すること、教育、健康、スポーツ、地域伝統文化の継承と振興、地域産業の振興	
近畿中国森林管理局	2008/9/16	「遊々の森」における体験活動	
京都大学	2010/6/1	特別研究学生交流	
東山区社会福祉協議会	2010/10/4	地域福祉活動、地域福祉推進	
京都市中央卸売市場第一市場	2013/11/5	健康増進・食育にかかる情報発信、市場活性化・市場流通品の促進、地域活性化	
京都府警察本部	2014/11/7	交通安全の課題と対策、交通安全活動、道路交通環境の改善、通学路の交通安全	
阪急電鉄株式会社	2015/3/26	教育、人材の育成、健康、スポーツ、地域伝統文化の継承、地域産業の振興	
鳥取県、公益財団法人ふるさと鳥取県定住機構	2015/6/29	就職支援、産学官連携、世代間交流、生涯学習	
招徳酒造株式会社	2015/9/18	地域産業・文化の伝承及び情報発信、地域活性化	
齊藤酒造株式会社	2015/9/18	地域産業・文化の伝承及び情報発信、地域活性化	
株式会社 朝日新聞社	2016/1/20	新聞産業・文化の継承と振興、メディア教育、人材の育成	
野村證券株式会社	2016/2/1	金融教育、人材育成	
株式会社三井住友銀行	2016/7/8	金融教育、人材の育成、地域活性化	
京都刑務所	2016/7/27	教育、人材の育成	
奈良女子大学	2016/9/23	女性人材、学生及び大学院生の交流、単位互換	
京都市立東山総合支援学校	2016/10/13	教育、人材の育成	
株式会社京都銀行	2016/12/8	金融教育、人材の育成、産学連携や地域活性化	
京都励学国際学院	2016/12/14	日本語教育課程、留学生教育、協定校の拡充	
NPO法人京都景観フォーラム	2017/1/17	地域景観教育、人材の育成	
ムーンバット株式会社	2017/2/6	デザイン教育、人材の育成	
ハイアットリージェンシー京都	2017/2/15	寄附講義、ホスピタリティ、人材の育成	
大阪ガス株式会社	2017/2/17	寄附講義、人材育成	
京都アメリカ大学コンソーシアム	2017/4/21	語学教育、人材の育成	
5×Ruby Inc.	2017/5/15	情報教育、人材の育成、インターンシップ	
武庫川女子大学	2017/7/11	SDの実施	
奈良先端科学技術大学院大学	2017/7/24	理系人材、学生及び大学院生の交流、単位互換	
オムロンパーソネル株式会社	2018/3/2	リカレント教育、人材の育成	
京都府立医科大学	2018/3/26	教育・研究、学生の交流、教職員・研究者交流	
大妻女子大学	2018/4/10	学生及び大学院生の交流、単位互換、教職員及び研究者の交流	
鹿児島国際大学	2018/7/23	学生・院生の教育・相互交流、学術研究、教職員の相互交流、地域貢献	
東山警察署	2018/7/24	事故・事件の防止活動と対策、教育・研究支援	
岐阜県白川村	2019/4/1	地域の活性化及び産業の振興、教育、伝統文化の継承と振興、人材の育成	
共立女子大学・共立女子短期大学	2019/5/1	学生の教育・学術研究、教職員の相互交流、地域貢献	
滋賀県多賀町	2019/6/12	地域産業の振興、地域活性化、人材の育成	
オムロンエキスパートリンク株式会社	2019/8/1	女性のためのリカレント教育プログラム構築・運営、再就職支援	
株式会社 ワークアカデミー	2019/8/1	女性のためのリカレント教育プログラム構築・運営、再就職支援	
西日本電信電話株式会社	2019/8/1	女性のためのリカレント教育プログラム構築・運営、再就職支援	

京都女子大学地域・産学官連携ポリシー

(平成29年2月9日制定)

京都女子大学は、創立以来、女性教育のパイオニアとして多様な分野で活躍する女性を輩出してきました。

本学では親鸞聖人の体した仏教に基づく教育を行うことを建学の精神としています。その目的は、人間教育にあります。仏教を通して自己を見つめ自己中心的な姿を明らかにします。互いが自己中心的存在であることを認め信頼関係を構築していきます。現実の諸問題に対しても、問題の本質を捉え、積極的に取り組む人間形成を目指した教育を実践しています。

この建学の精神に則り、京都女子大学は、地域社会、国と地方公共団体、産業界、そして国際社会の発展に寄与する地域・産学官連携を教育と研究に並ぶ大学の使命の一つとして位置付け、この使命を実現するための基本方針として、以下の通り「地域連携ポリシー」および「産学官連携ポリシー」を定めます。

《地域連携ポリシー》

1. 本学の建学の精神に鑑み、地域社会との持続的な連携を行い、地域社会の活性化のために貢献します。**(社会貢献)**
2. 地域連携活動を通じて、地域に関する教育・研究の進展を図るとともに、地域社会の発展に貢献できる女性人材を育成します。**(教育研究促進・人材育成)**
3. 地域連携により得られた知の成果を広く社会に還元し、地域社会と地域課題の共有に努めます。**(地域課題の共有)**
4. 地域連携活動を積極的に推進するための活力ある組織運営を行います。**(体制整備)**
5. 地域連携活動を大学の自己評価に反映させます。**(自己評価)**
6. 本学の地域連携活動を大学の内外に向けてわかりやすく発信します。**(情報公開・広報活動)**

《産学官連携ポリシー》

1. 公的機関・企業等との共同研究・受託研究等を積極的に推進し、社会・経済の発展に寄与するとともに、本学の教育研究活動の基盤向上を図ります。**(共同研究)**
2. 産学官連携活動から得られる成果を本学の教育・研究の促進に役立てます。**(教育研究促進)**
3. 産学官連携活動を通じて、社会の発展に貢献できる女性人材を育成します。**(人材育成)**
4. 本学と公的機関・企業等との組織間の明確な契約による連携を基本とし、産学官連携により得られた知的財産を適切に保護・管理し、有効活用していきます。**(知財管理・活用)**
5. 透明性の高い産学官連携活動を行い、説明責任を果たします。**(説明責任)**
6. 産学官連携活動を積極的に推進するための活力ある組織運営を行います。**(体制整備)**
7. 産学官連携活動を大学の自己評価に反映させます。**(自己評価)**
8. 本学の産学官連携活動を大学の内外に向けてわかりやすく発信します。**(情報公開・広報活動)**

以上



編集・発行

京都女子大学 地域連携研究センター

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町35

TEL. 075(531)9057 FAX. 075(531)7323

E-mail: r-suishin@kyoto-wu.ac.jp

URL: <http://rccp.kyoto-wu.ac.jp>